

富士山資料館特別展資料集

富士山麓を訪れた歌人たち



十里木頼朝の井戸の森に建つ水原秋櫻子の句碑

平成15年度

裾野市教育委員会／裾野市立富士山資料館

はじめに

富士山は万葉の時代から人々に愛され、絵に描かれ詩に歌われ、今日でも私たちの心のふるさととして親しまれています。富士山が私たちに見せるその姿は、望む場所や方向はもちろん、四季折々や朝夕の光にもその姿を変え、富士の魅力はとどまる所を知らないと言っても過言ではないでしょう。

今回は、万葉の時代から富士の姿を詩歌の中でその優美さを表現してきた作品を時代を追って紹介します。当時の人々の富士への心に触れてみましょう。また、私たちが毎日見て、触れているこの地から望む富士山をこよなく愛し、親しんだ近代歌人にも視点を当て、場所と季節あるいは時間、その頃の風景を現代にオーバーラップして作品に親しんでみようと思います。

富士山は、古来より短歌や俳句や詩、また童謡や唱歌にも歌われています。いったいいくつの歌に登場しているのでしょうか。私たちが富士山の歌を考えたとき、自然に口ずさんでいる歌はどのような曲でしょうか。あなたが選ぶ富士山の曲を紹介してください。

もくじ

I. 日本人の心 万葉の歌から富士を詠う

1. 和歌の歴史…………… 1
2. 万葉に詠まれた富士山…………… 3
 - (1) 高橋虫麻呂
 - (2) 山部赤人
 - (3) 西行法師
 - (4) 道興准后
 - (5) 飯尾宗祇
 - (6) 松尾芭蕉

II. 富士南麓から望む富士の姿に親しんだ近代歌人

1. 若山牧水…………… 8
 - (1) 歌人 若山牧水
 - (2) 富士山麓、裾野と牧水
 - (3) 富士山麓を題材にした作品
 - (4) 裾野牧水祭について
2. 川田 順…………… 12
 - (1) 歌人 川田 順
 - (2) 富士山麓、御殿場、裾野と順
 - (3) 富士山や御殿場、須山周辺を題材にした作品の誕生
 - (4) 富士裾野大野原と深良に建てられた歌碑
3. 水原秋櫻子…………… 19
 - (1) 俳人 水原秋櫻子
 - (2) 富士山麓、裾野と秋櫻子
 - (3) 富士山麓を題材にした作品
 - (4) 十里木の秋櫻子句碑誕生の経緯
 - (5) 富士宮「奇石博物館」句碑誕生の経緯
 - (6) ありし日の秋櫻子
 - (7) 秋櫻子愛用品と作品など
 - (8) 「馬酔木」平成15年12月号より
 - (9) 来館された方の俳句作品
 - (10) 山麓を詠み継ぐ

III. 身近な富士山の歌

1. 校歌に歌われた富士山…………… 30
 - (1) 裾野市
 - (2) 小山町
 - (3) 御殿場市
 - (4) 富士市
 - (5) 富士宮市
 - (6) 富士郡
 - (7) 山梨県河口湖町
 - (8) 山中湖村
 - (9) 忍野村
 - (10) 鳴沢村
 - (11) 上九一色村
 - (12) 富士吉田市
2. 静岡・山梨両県の校歌に富士山はどれだけ歌われているか…………… 42
3. おもいで唱歌…………… 43
 - (1) 巖谷小波
 - (2) 林 柳波
 - (3) 中山晋平
 - (4) 大和田健樹

IV. 出品目録…………… 44

あとがき…………… 45

I. 日本人の心 万葉の歌から富士を詠う

万葉の時代から時の移り変わりの中で、富士を詠う歌人や人々の心を知ろう。

日本人の心のふるさと富士山、その富士山は万葉の時代（710年～793「奈良時代」）より歴史の中へ登場しています。日本的な感性で、自然に親しみ、自然に優しく、自然と共存し、生きてきた古きよき時代に、詠われた和歌を中心に触れて見たいと思います。

万葉集は、奈良時代に誕生しておりますが現代に通じる歌も多く、ここで幾つか富士を詠んだ代表作品をご紹介します。

1. 和歌の歴史

「万葉集」は奈良時代に編集された、日本最古の和歌集です。大伴家持らにより編集され、天皇、貴族から庶民にわたるさまざまな人たちの歌が集められました。このころの歌は素朴でおおらかなのが特徴です。

平安時代から鎌倉時代にかけて、和歌は貴族を中心に盛んになり醍醐天皇の命令で、紀貫之らが編集した「古今和歌集」には、優美な歌が目立ちます。その後、後鳥羽上皇が藤原定家らに編集させた「新古今和歌集」の歌は、表現がたいへん洗練されています。

個人の歌集としては、西行が自然や人間への愛をうたった「山家集」などがあります。また、源実朝が自分の歌をまとめた「金槐和歌集」は、万葉調の歌に特色があります。

室町時代には、和歌にかわり和歌から生まれた連歌（和歌の上の句と下の句を次々と連ねていく遊び）が盛んになりました。

和歌には元来さまざまな形式があり、五・七・五・七・七の短歌も、その一つでした。しかし、平安時代には、短歌以外の形式はすたれ、和歌といえば一般に短歌を指すようになり、明治時代に和歌は短歌と呼びかえられました。

日本文学史略年表

年号	推古	推古	文武	大宝	和銅	養老	天平	天平勝宝	延暦	弘仁	天長	承和	貞観	元慶	昌泰	延喜	承平	天慶	天曆	康保	天延	正暦	長徳	長保	寛弘						
西暦	五九六	六一五	六九七	七〇一	七一〇	七二〇	七三二	七五五	七八五	七九四	八〇〇	八二七	八四〇	八五九	八六九	八七二	八八〇	九〇〇	九〇三	九〇五	九三五	九四〇	九四五	九五三	九六六	九七三	九九〇	九九五	一〇〇〇	一〇〇二	
作家				柿本人麻呂		大伴旅人	山上憶良 高橋虫麻呂 山部赤人		大伴家持		最澄			在原業平	藤原敏行	藤原道真			紀貫之	小野道風		清原元輔	藤原道綱				源氏物語 枕草子				
作品名・できごと	大和・元興寺露盤銘	天皇記・国記	古歌集	柿本朝臣人麻呂歌集	★平城宮遷都	古事記・(太安万侶)	日本書紀	出雲風土記	防人の歌 懐風藻	★平安遷都	続日本紀	★富士山噴火	日本書紀 日本書紀 ★富士山大噴火	日本書紀 日本書紀 ★富士山大噴火	経国集	日本書紀	★富士山大噴火	文徳実録	続日本紀	★富士山大噴火	竹取物語	三代実録	延喜式	古今和歌集・伊勢物語	和名類聚鈔	土佐日記	将門記	貫之集	大和物語	宇津保物語・蜻蛉日記	

年号	西暦	作家	作品名・できごと
天正	一五七三	山崎宗鑑 (八一)	★室町幕府滅亡
天文	一五四〇		
永正	一五二八		
文龜	一五〇二	飯尾宗祇 (八一)	閑吟集
明応	一四九五	道興准后	詩文集「廻国雜記」
文明	一四七〇		新撰菟玖波集(宗祇)
永享	一四三九		吾妻問答(宗祇)
応安	一三七〇		新統古今集
延文	一三五六		太平記
観応	一三五〇	吉田兼好 (六八)	菟玖波集
建武	一三三六		★室町幕府開く
元弘	一三三三		★北条氏滅亡
元徳	一三三二	京極為兼 (七九)	徒然草
正和	一三二二		玉葉集
弘安	一二八〇	藤原為家 (七八)	十六夜日記
文永	一二七四		★文永の役
建長	一二五二		十訓抄
仁治	一二四一	藤原定家 (八〇)	宇治拾遺物語
嘉禎	一二三七	藤原家隆 (八〇)	平治物語
承久	一二二二	源 実朝 (二八)	平家物語
建永	一一九二	鴨 長明 (六四)	金塊集
元仁	一一〇五	藤原俊成 (九一)	新古今集・保元物語
建久	一一〇二		水鏡
建久	一一九〇	西行 (七二)	山家集
◆中世		天平鎌倉・室町時代	
承暦	一〇七九		今昔物語・狭衣物語
康平	一〇七八		大鏡
天喜	一〇五五		更級日記
長元	一〇三五		堤中納言物語
万寿	一〇二二		栄花物語
長和	一〇一七	藤原行成 (五六)	★富士山噴火
寛弘	一〇一三	紫式部 (二六)	和泉式部集
	一〇一〇		和漢朗詠集
	一〇〇八		紫式部日記
			和泉式部日記

年号	西暦	作家	作品名・できごと
明治	一八七二	明治・大正・昭和	
嘉永	一八四八	曲亭馬琴 (八二)	★大政奉還
天保	一八三三		南総里見八犬伝
文政	一八二七	小林一茶 (六五)	
明和	一七六九	賀茂真淵 (七三)	
享保	一七二四	近松門左衛門	
宝永	一七〇七		東海道中膝栗毛
元禄	一六九四	松尾芭蕉 (五一)	★富士山噴火で宝永山でできる奥の細道
天和	一六八二	井原西鶴 (五二)	
承応	一六五四	西山宋因 (七八)	
元和	一六一五	松永貞徳 (八三)	
慶長	一六〇三		★大阪夏の陣
◆近世		江戸時代	
慶長	一六〇〇		★徳川家康江戸に幕府を開く
慶長	一五八二		★関ヶ原の戦
			★本能寺の変
大正	一九一〇	石川啄木 (二七)	
大正	一九〇八	伊藤左千夫 (五〇)	桐の花(北原白秋)
大正	一九〇五	国木田独步 (三八)	死か芸術か(若山牧水)
大正	一九〇一	福沢諭吉 (六八)	独り歌へる・別離・(若山牧水)・一握の砂
昭和	一九二八		海の声(若山牧水)
昭和	一九二七		吾輩は猫である(漱石)
昭和	一九二六	芥川龍之介 (三六)	みだれ髪(昌子)・武蔵野(独歩)
昭和	一九二四		金色夜叉(紅葉)・心の花参加(川田順)
昭和	一九二二	若山牧水 (四四)	第一九世紀日本ノ青年及其教育
昭和	一九二〇	伊豆の踊子(川端康成)	学問のススメ(論吉)
昭和	一九一八	芥川龍之介 (三六)	
昭和	一九一七		麦の秋(若山牧水)・馬酔木(水原秋櫻子)
昭和	一九一六		★太平洋戦争終る
昭和	一九一五		★太平洋戦争始まる
昭和	一九一四		人間失格(太宰治)
昭和	一九一三		★太平洋戦争終る
昭和	一九一二	若山牧水 (四四)	
昭和	一九一〇	芥川龍之介 (三六)	
昭和	一九〇九		伊豆の踊子(川端康成)
昭和	一九〇八		みなかみ紀行(若山牧水)
昭和	一九〇七		大野原の夏草(若山牧水)
昭和	一九〇六		富士裾野三日(若山牧水)
昭和	一九〇五		技芸天(川田順)
昭和	一九〇四		桐の花(北原白秋)
昭和	一九〇三		死か芸術か(若山牧水)
昭和	一九〇二		独り歌へる・別離・(若山牧水)・一握の砂
昭和	一九〇一		海の声(若山牧水)
昭和	一九〇〇		吾輩は猫である(漱石)
昭和	一九〇〇		みだれ髪(昌子)・武蔵野(独歩)
昭和	一九〇〇		金色夜叉(紅葉)・心の花参加(川田順)
昭和	一九〇〇		第一九世紀日本ノ青年及其教育
昭和	一九〇〇		学問のススメ(論吉)

2. 万葉集に詠まれた富士山 —— 神の山・眺める山 ——

(1) ^{たかはしむしまろ}高橋虫麻呂

生没年不詳。奈良時代の歌人。

経歴は不詳ですが、『万葉集』に天平4(732)年藤原宇合が西海道節度使となった時に贈った歌があり、宇合の配下にあった人物です。常陸での作歌も多く、宇治の常陸守在任に従いました。長歌にすぐれ、『高橋虫麻呂歌集』が存在しました。

不盡山を詠ふ歌 一首 短歌を併せたり

- ① なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国と こちごちの 国のみ中ゆ 出て立てる
 不尽の高嶺は 天雲と い行きはばかり 飛ぶ鳥も 飛びものぼらす もゆる火を 雪もて消ち
 ふる雪を 火もて消ちつつ 言ひもえず 名つけも知らず くすしくも います神かも
 石花の海と 名つけてあるも その山のつつめる海そ 不盡川と 人の渡るも その山の
 水のたぎちそ 日の本の 大和の国の鎮とも います神かも 宝とも なれる山かも
 駿河なる 不盡の高嶺は 見れと飽かぬかも

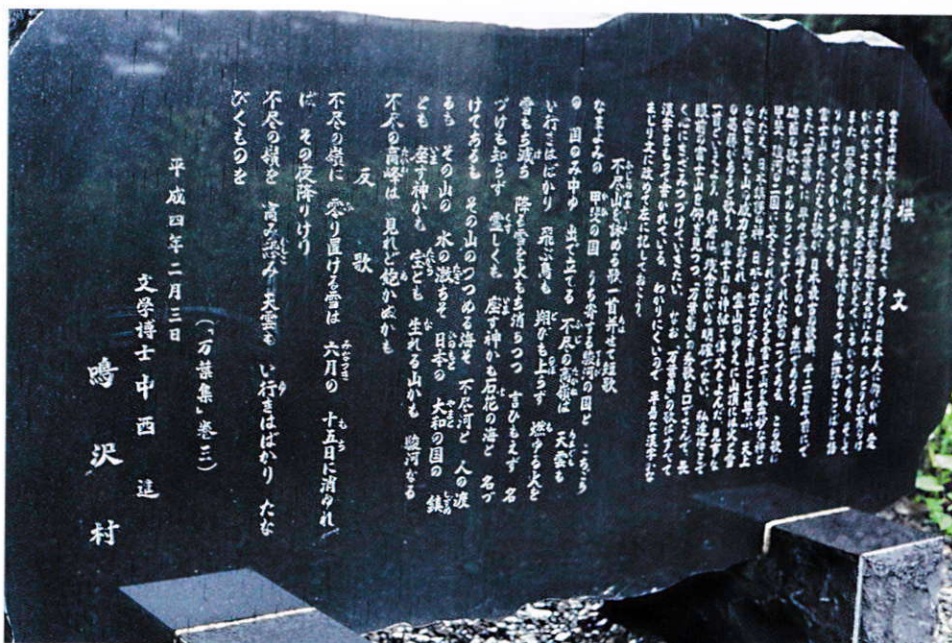
甲斐の国と駿河の国と、両方の国のまん中からそびえ立っている富士の高嶺は、空行く雲がはばまれて進めず、飛ぶ鳥も飛び越えて行くことが出来ず、燃える火を雪で消し、降る雪を火で消しながら、とても畏言いようもなく、名づけようもないほど、靈妙にまします神の山であることよ。石花の海と名づけているのも、その山がつつんでいる湖である。富士川といって人が渡る川も、その山から出る水の激しい流れである。日の本の大和の国の鎮護としてまします神であることよ。宝ともなっている山であることよ。この駿河の富士の高嶺は見ても見ても飽きないことよ。

反歌

富士の嶺に降り置く雪は六月の十五日に消ぬればその夜降りけり

富士の山に降り積もっている雪は、六月の十五日に消えると、すぐその夜には降るとのこと。

布士の嶺を高め恐み 天雲とい行きはばかり たたなひくものを



不盡山を詠ふ歌

やまべのあかひと
(2) 山部赤人

神亀元～天平8(724～736)年。奈良時代の歌人。

官暦不詳。下級官人であったと思われる、聖武天皇の紀伊、吉野、播磨、灘への行幸に従駕して歌を詠んでおり、宮廷歌人として活躍しました。旅の歌が多く、東は下総、葛飾、西は伊予道後温泉まで各地での歌があり、官人として赴任したかと思われる。「山柿の門」として柿ノ本人麻呂と並称し、『古今集』仮名序にも人麻呂と比肩する歌人としている。

不尽山を望む歌 一首 短歌を併せたり

② 天地の 分れし時ゆ 神さひて 高く貴き 駿河なる 布士の高嶺を天の原 振り放け見れば
渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きははかり 時じくそ
雪は降りける 語り継ぎ 言い継ぎ 行かむ 不尽の高嶺は

天と地が分かれた神代の昔から、神々しくて高く貴い駿河の富士の高嶺を、大空はるかに振り仰いで見ると、空を渡る太陽の光も隠れ、照る月の光も見えない。白雲もはばまれて行きとどこおり、いつも雪は降っていることよ。いつまでも語り継ぎ言い継いで行こう、この富士の高嶺は。

反歌

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける

田子の浦を通過って広々とした所に出てみると、真っ白に富士の高嶺に雪が降り積もっていること。



不尽山を望む歌



山部赤人
(小倉百人一首)

(3) ^{さいぎょうほうし}西行法師

元永元～建久元(1118～1190)年平安後期の歌人。

俗名は義清(憲清)晩年に円位と号し、大宝房とも言います。1136年にわかにかに出家し西行と名のる。出家後数年間は嵯峨・東山・鞍馬などの草庵や寺を転々として修行。久安3(1147)年陸奥・出羽に旅し、帰京後高野山に庵を結び、ここを本居として都に出かけ、あるいは各地を遍歴し、作歌活動を続けた。家集に『山家集』など数々あり、『新古今集』に94首が入集。

③ 風になびく富士の煙の空に消えて行くへも知らぬわが思ひかな

風になびく富士山の煙が空に消えて、そのゆくえもわからない。それと同じように、ゆくえもわからない私のおもいよ。



西行法師
(小倉百人一首より)

(4) ^{どうこうじゅんこう}道興准后

?～文亀元(～1501)年。室町時代の後期の僧侶。

園城寺長史で聖護院門跡も歴任。文明18年6月上旬より長享元(1487)年5月に至る約1年にわたって東国を巡歴し、その後明応2年には西国・四国歴遊の途に上るなど全国の聖跡や名所旧跡を巡っているが、東国巡歴の旅行記およびその詩文集は『廻国雑記』1巻(『群書類従』記行部)として現存している。

④ よそにみしふしのしら雪けふわけぬ心のみちを神にまかせて

詩文集『廻国雑記』記録の中に「すはま口(須山口)」として富士山須山口登山道を紹介している。

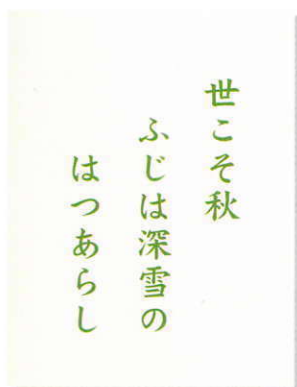


道興准后 歌碑

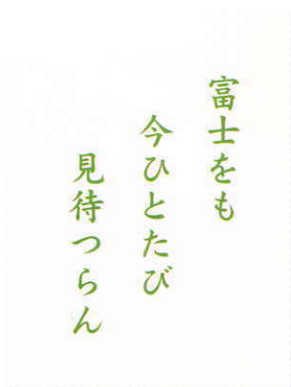
(5) ^{いとおそうぎ}飯尾宗祇

応永28～文亀2(1421～1502)年。室町・戦国時代の連歌師。

幼時相国寺に入り禅僧として修行した。当時相国寺には画僧雪舟も修行していた。諸国に旅して連歌を普及、全国に門人を養成し、多くの歌論書・紀行文・歌集・句集を残した。『吾妻問答』など。文亀2年越後から駿河に向う途中箱根湯本で客死。宗祇終焉の地は、裾野市桃園定輪寺。



宗祇五百年記念碑



碑文



宗祇像

(6) 松尾芭蕉

正保元～元禄7(1644～1694)年。江戸前期の俳人。

本名宗房、通称を忠右衛門、伊賀国(三重県)で生まれた。芭蕉は独自の作風を作り上げこれが『蕉風』と呼ばれ、中世的な美意識である「さび」を俳諧の軽みの中に取り入れて完成させたものである。芭蕉は俳諧史上最大の人物とされ、その作品には『奥の細道』『野ざらし紀行』等著名な句集・俳文・紀行文が数多くある。芭蕉は元禄7(1694)年大阪蕉門でおきた確執のため、大阪にやって来たが、これが最後の旅となり、10月12日に亡くなった。

眼にかかる時や殊更
さつき富士



⑦

ひと尾根はしくる雲か
不二の雪



⑧

霧しぐれ
富士を見ぬ日ぞ
おもしろき

⑨

(7) 作者不明

⑩ 天の原富士の柴山このくれの時移りなば逢はずかもあらむ



① よそにみしふじのしら雪
けふわけぬ心のみちを
神にまかせて



道興准后歌碑 (須山浅間神社入口)

② 世有汚隆野有賢
汚隆齊仰岳之蓮
高高師表岳蓮在
猶且雄姿待霽天



国府犀東詩碑 (須山浅間神社境内)

③ 帝檀咫尺躡虚通
落木峰頭眼界空
群嶂彩衣齋跪拜
天邊一嶽玉玲瓏



国府犀東詩碑 (十里木高原)

④ なびき寄る
雲のすがたの
やはらかき
けふ富士が嶺の
ゆうまぐれかな
牧水



若山牧水歌碑 (裾野市立富士山資料館前庭)

⑤ 日をひと日
富士をまともに
仰ぎきて
こよひを泊まる
野のなかの村
牧水



若山牧水歌碑 (須山清水館前)

⑥ 不二のねの
ふもと萱原
はてもなし
くわっこう鳴くと
耳そばだてつ
順



川田 順歌碑 (須山忠ちゃん牧場)

⑦ ほととぎす
朝は童女も
草を負ふ
秋櫻子



水原秋櫻子句碑
(十里木頼朝の井戸の森)



II. 富士山麓から望む富士の姿に親しんだ近代歌人

1. 若山^{ほくすい}牧水

(1) 歌人 若山牧水

明治18(1885)年8月24日、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷で、若山立蔵、マキの長男として生まれる。

本名 若山 繁(わかやま しげる)

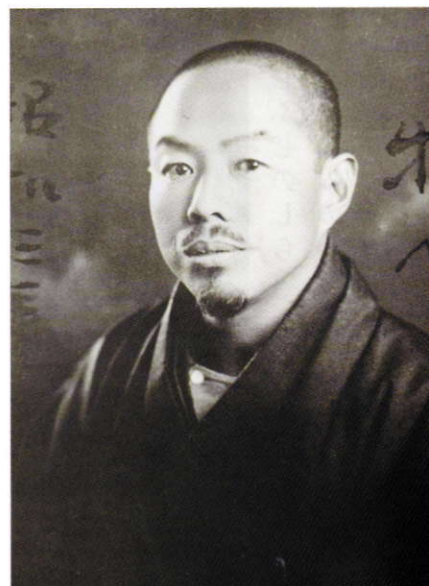
明治32年延岡中学校入学。中学校時代から「新声」その他に短歌・和歌・新体詩などを投稿する。

明治37年7月早稲田大学入学。明治41年7月卒業。明治45年5月太田水穂を通じて知った太田喜志子と結婚。大正9年夏沼津市香貫へ移住後、半折短冊会を組織し、大正14年から昭和2年の間に3回にわたり全国を揮毫旅行を行い、千本松原に家を新築した。

牧水の生活は旅と酒で知られているが、旅行をして歌を作り、紀行文を書いて生活の糧にしていた。主宰誌「創作」は明治43年に創刊され、一時とぎれることもあったが牧水死後、妻喜志子が継ぎ現在も子息によって受け継がれている。大正9年沼津に移り住んでから富士山麓、愛鷹連邦、箱根山、伊豆へと旅をかさねた。特に、富士山には強い関心をよせていたようである。

「富士裾野の三日」(大正9年10月)、「野なかの滝」(大正10年)、「大野原の夏草」(大正11年)の3つの紀行は富士山麓を旅した際の作品で、富士山麓の自然や町並み、風景などを親しみ深く表現している作品といえる。

この他幾度となく裾野を訪れ多くの歌を創作している。また、裾野在住の鈴木秋灯(故人)とは大正12年頃より親交が深まり、牧水の創作活動や家の新築についてなどお互いに励ましあい、家族同様の親交があったと思われる。



若山牧水

◆年譜

年号	内 容	年 齢
明治18年	8月24日、立蔵・マキの長男として、宮崎県東臼杵郡東郷村坪谷に生れる。	0 歳
明治29年	3月、坪谷尋常小学校卒業。4月延岡高等小学校入学。	12 歳
明治32年	3月、延岡高等小学校3学年修業。4月、延岡中学校入学。	15 歳
明治34年	2月、交友会雑誌へ初めて和歌を発表。7月、雑誌「中学文壇」に初投稿の文が入賞	17 歳
明治35年	2月、級友と回覧雑誌「曙」発行。	18 歳
明治36年	4月、短歌研究の回覧雑誌「野紅」発行。この年から各種雑誌や新聞に散文、短歌、俳句、新体詩を盛んに投書する。秋ごろから「牧水」の号を使用。	19 歳
明治37年	3月、延岡中学校卒業。4月上京、早稲田大学文学部高等予科入学。5月「新声」歌壇選者の尾上紫舟を訪問し入門する。7月英文科入学。	20 歳
明治38年	尾上紫舟、前田多暮、正富狂洋らと金箭会及び車前草社を結成。「新声」短歌欄を舞台に活躍する。	21 歳
明治39年	春から同級生と北斗会を結んで小説の創作研究に努め、回覧雑誌「北斗」を発行。	22 歳
明治40年	10月「新声」の編集に関与。純文学で立とうと熱心に小説を書く。	23 歳
明治41年	7月、早稲田大学英文科卒業。同月、第一歌集「海の声」を出版する。	24 歳

明治42年	7月、中央新聞社入社するも4ヶ月で退社。	25 歳
明治43年	1月、第二歌集「独り歌へる」出版。3月、創刊の雑誌「創作」を編集。4月、第三歌集「別離」出版で一躍歌壇の花となる。9月恋愛の苦しみから漂泊の旅に出る。	26 歳
明治44年	創作社を興し、続いて「創作」を編集したが10月限りで廃刊。12月やまと新聞社入社するが、2ヶ月で退社。	27 歳
明治45年	5月、太田喜志子と結婚。短歌雑誌「自然」を創作したが、資金難のため一号のみに終わる。	28 歳
大正 2年	8月、「創作」復活。	29 歳
大正 4年	3月、病妻のため三浦半島北下浦の海岸に転地。	31 歳
大正 5年	12月、東京に移る。	
大正 9年	2月、伊豆旅行。8月、沼津町上香貫に転居。10月、裾野を始め富士山麓に強い関心をよせ足を運ぶ。	36 歳
大正11年	10月、信州、野州、上州路の「みなかみ紀行」の旅に出る。	38 歳
大正12年	7月、沼津町、楊原村と合併し沼津市となる。9月、関東大震災。小泉村（現裾野市）在住の鈴木秋灯（浚一）との親交が深まる。	39 歳
大正13年	住宅と雑誌発行の事務所を兼ねた家を新築するための、資金調達のため揮毫頒布（きごうはんぷ）を企て、夫婦で全国的に行脚を始める。7月「みなかみ紀行」出版。	40 歳
大正14年	10月・上旬、沼津市市道の新築（土地500坪、建坪78.72坪）の家に移る。	41 歳
大正15年	5月念願の詩歌総合雑誌（詩歌時代）を創刊するが資金難のため、10月号で廃刊。9月から暮まで北海道、東北、大阪、名古屋方面に旅行。	42 歳
昭和 2年	5月から7月にかけて九州各地から朝鮮へと揮毫旅行。	43 歳
昭和 3年	7月ごろから健康すぐれず、9月初めから病臥。9月17日、急性腸胃炎兼肝硬変病のため永眠。	44 歳

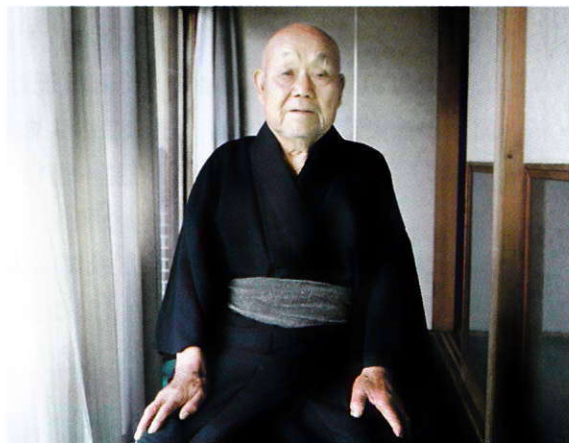
(2) 富士山麓、裾野と牧水（牧水と秋灯との関わり）

富士が好きな牧水は、裾野の風物をもこよなく愛し秋灯宅や五竜館・清水館へ泊り、付近の野を歩き山へ登り、林に分け入り裾野の山野至る所に足跡を残している。そして裾野の紀行文・短歌を数多く、新聞や雑誌に発表している。

「富士裾野の三日」「野なかの竜」「大野原の夏草」などの紀行文や、また二百首にもものぼる短歌を世に紹介する。

牧水が初めて裾野の地を踏んだのは、大正9年8月に沼津市に住んでまだ2ヶ月も経たない、10月9日のこと

である。以後いくたびか裾野を訪れている。また、大正12年頃から鈴木秋灯（浚一）との出会いから（牧水は、秋灯にとって短歌の師であり、人生の師）お互いに急速に親しみを増して、行き来がしげくなっていく。そして牧水と秋灯は、連れ立って箱根・伊豆などへよく旅に出ている。それ以上に牧水が沼津市千本へ住宅を新築したことから、植木の植栽などについて秋灯がよく手助けをしている。もはや師弟関係ではなく、友人としての付き合いだったと思われる。



鈴木秋灯

(3) 富士山麓を題材にした作品

- ① 大正9（1920）年10月9日～11日（紀行文「富士裾野の三日」）

御殿場駅から富士山麓の高原を歩く。9日の宿は須山・清水館、10日十里木～富士宮～十里木泊～須山～御殿場駅～沼津駅～千本

なびき寄る雲のすがたのやわらかきけふ富士が
嶺の夕まぐれかな

(かくて夕ぐれ近く迄大野原の美しさに耽溺しつつして茶屋に帰ってきたところである。)



富士山資料館内にある歌碑

② 大正10(1921)年8月13日～14日(紀行文「野なかの竜」)

千本～沼津駅～裾野駅～五竜館ホテル泊～景ヶ島～大畑～裾野駅～千本

富士が嶺やすそのに來り仰ぐときいよよ親しき山にぞありける

(起伏面白い岡を登ったり下りたりさすがに疲れた牧水は、ついにこれぞと思う丘の上に寝そべった。富士は真上から牧水を覗き込んで居る。富士が大好きな牧水であるが、富士は遠くから見るべきもの、まして雪のない富士なんかと思っていた。それが今一本の木も草もない岩肌の富士を間近に見て限らない親しみを覚えたところである。)



中央公園にある歌碑

③ 大正11(1922)年6月4日～5日(紀行文「大野原の夏草」)

富士山麓大野原を歩く。一連31首の中の一首

沼津駅～裾野駅～須山街道(石脇～御宿～今里～須山・清水館泊～印野～御殿場駅～沼津駅)

日をひと日富士をまともに仰ぎ来てこよひを泊る野の中の村

(今日1日富士は、牧水の行く手に見えかくれて居た。野の中の村は、須山であり宿は清水館である。)



須山、清水館の歌碑



清水館、牧水が宿泊した室

④ 昭和3(1928)年6月末、鈴木秋灯(浚一)宅来訪。五竜館泊「麦の秋」のなかから六首

立ち寄れば麦刈りにけふ出てゆきて留守てふ友
が門の柿の花

(体調をこわしていた牧水も小康を得て、友である秋灯宅へ訪ねて来たが、麦刈に出ていて留守であった。その友の家の門に柿の花が咲いていた。)



佐野・鈴木秋灯宅の歌碑

麦の穂の風にゆれたつ音きこゆ雀つばくら啼きしに

うちわたす麦の畑のゆたかなるさまをし見れば夏蘭けにけり

熟麦のうれとほりたる色深し葉さへ茎さへうち染まりつゝ

うれ麦の穂にすれすれにつばくらめまひ群れて空に揚げ雲雀なく

刈麦を積み溢らせて荷車のひとつ行くなり此の野のみちを

(4) 裾野牧水祭について

裾野市内には、牧水の歌碑が五基ありその第一基目は、昭和50年に中央公園内に建てられた。以後、第二基目が富士山資料館中庭、第三基目が須山・清水館中庭、第四基目が鈴木秋灯宅中庭、そして最後の第五基目が、平成3年市民文化センター内に牧水常設展示室ができたことに合わせ、牧水の大好きな富士の見える、そして黄瀬川のせせらぎの聞こえる現在地に建てられた。

裾野牧水祭は、昭和50年から平成2年まで中央公園牧水歌碑前で、平成3年以降は市民文化センター歌碑前で毎年9月第二日曜日に開催され、今年で早や28回となっている。当日は、裾野市立鈴木図書館・裾野市教育委員会主催で、関係者が多数出席し盛大に行われている。

今や、中央公園から十里木の富士山資料館まで五つの牧水歌碑を結ぶ道は、牧水の道として各地の短歌会・読書会などの団体を始め、牧水に関心を持つ人々がよく訪ねて来ております。この句碑を結ぶ道は、裾野の文化探訪のコースとして、人々に永く親しまれることでしょう。



例年行われている裾野牧水祭



市民文化センター中庭にある歌碑と
藤岡日本歌人クラブ会長

2. 川田 じゅん 順

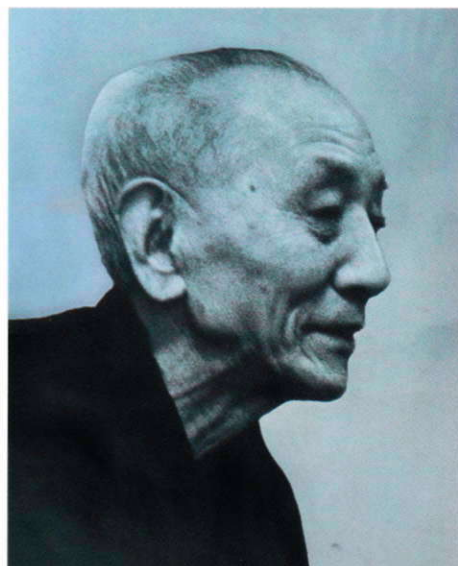
(1) 歌人 川田 順

明治15（1882）年、東京都浅草に生まれる。宮中顧問官文学博士、父は漢学者川田剛（甕江）。東京大学卒。明治40年住友総本店に入社、実業界で活躍する。明治40年から昭和24年まで関西に居をかまえた。昭和24年に神奈川県国府津に転居、27年に同県藤沢に住む。

城北中学校在学中、明治30年、16歳で佐々木信綱に師事。翌31年に創刊された歌誌「心の花」に参加、歌人として出発する。自主知的ロマン主義から写実主義、やがて明快な近代的風格のある作風に進む。信綱のほか、石樽千亦、木下利玄らを知る。

代表作に大正7年3月、第1歌集として「伎芸天」を刊行し、その他「山海経」・「鷺」などがある。

中世、特に新古今集時代の和歌に詳しく「西行」をはじめ「藤原定家」など、多くの研究書がある。特に昭和14年11月発行の「西行」や昭和15年11月発行の「西行研究録」、昭和19年11月発行の「西行の伝と歌」の3部作は、西行研究史上画期的な仕事であり、さらに研究史上未開であった部分に調査研究を進めた「幕末愛国歌」（昭和14年）・「定本吉野朝の悲歌」（昭和14年）・「戦国時代和歌集」（昭和18年）の3部作も貴重な実績であり、昭和19年1月に後者により朝日文化章を受賞している。



川田 順

◆年譜

年 号	内 容	年 齢
明治15年	宮中顧問官 川田剛（甕江）の三男として東京に生まれる。	0 歳
明治30年	佐々木信綱の門に入る。	16 歳
明治31年	「心の花」が創刊、同人となる。	17 歳
明治35年	東京都帝国大学文科（英文科）に入る。	21 歳
明治37年	小山内薫、竹林夢想庵らと雑誌「七人」を創刊。	23 歳
明治40年	大学卒業後、住友に入社。関西に居をかまえる。	26 歳
大正 7年	歌集「伎芸天」を出版。	37 歳
大正11年	歌集「山海経」を出版。	41 歳
昭和 5年	歌集「青淵」、現代短歌集「川田順」を出版。	49 歳
昭和10年	歌集「旅雁」を出版。日本ペンクラブ創立理事。	54 歳
昭和11年	「俊成・定家・西行」を出版。住友をやめ、実業界より引退。	55 歳
昭和13年	「吉野朝の悲歌」出版「全釈金槐和歌集」「源実朝」出版。	57 歳
昭和15年	歌集「鷺」「西行研究録」を出版。	59 歳
昭和17年	「鷺」「国初聖蹟」に対し、第1回帝国芸術院賞を授与される。	61 歳
昭和19年	「吉野朝の悲歌」「幕末愛国歌」「戦国時代和歌集」と歌集50年に対して、朝日文化賞を受賞。	63 歳
昭和21年	東宮御作歌の指南役を命じられる。天皇皇后両陛下に「現代短歌の大観」を進講。	65 歳
昭和22年	歌集「寒林集」を出版。	66 歳
昭和23年	宮中御歌始の選者を拝命。雑誌「心」の同人となる。	67 歳

昭和24年	3月、京都から神奈川県国府津に移る。5月徳富蘇峰先生を伊豆山（熱海）晩晴堂に訪ねる。	68 歳
昭和27年	歌集「東帰」「川田順全集」を出版。藤沢に住む。	71 歳
昭和28年	舞劇「木蘭物語」を書き、東京歌舞伎座、京都南座にて公演。	72 歳
昭和31年	「平安秀歌」を出版。	75 歳
昭和32年	奈良秋篠寺に「伎芸天」を歌った歌碑が建つ。	76 歳
昭和35年	現代歌人協会名誉会員に推される。明治両陛下御集の編纂委員となる。	79 歳
昭和38年	日本芸術院会員に推される。裾野市須山山口を訪れ、「かっこう」などを題材に数種の作品をのこす。	82 歳
昭和40年	明治両陛下の御集完成。	84 歳
昭和41年	1月22日永眠。葬儀は住友合同葬。正五位勲三等。	85 歳

〈川田 順を代表する作品〉

「伎芸天」大正7（1918）年3月発表

第1歌集、佐々木信綱、桑木巖翼の序、武林無想庵および順自身の跋が付けられている。巻頭に、庶子であるという自身の出生に関わる一連「みなし児の歌へる」を置き、巻末に身分制度の厳しい時代にあつての絶望的な恋愛、順「葵の女」を呼んだ徳川慶吉の五女国子との恋を素材にした相聞歌群「紅涙集」を収めており、この2作が歌集を特色づけている。心情によって現実を越えようとする順の浪漫的な作集である。順の全作品の基底部を貫くものといつてよい。

「鷺」昭和15（1940）年6月発行

川田順8作目の歌集にあたり、昭和11年から14年までの作品を収めている。つまり、実業界を引退して文学一筋でゆこうと決めてから、はじめての歌集であり、その気迫がこの歌集を緊張させている。

旅行詠が多く、北海道、東北から九州、さらに北支にまでおよんでいる。雄大な自然を堂々たるリズムで歌い上げたいく首かは、順の短歌の一つの到達点を示している。

「東帰」昭和27（1952）年6月発行

第13歌集にあたり、のち「定本川田順全歌集」、昭和32（1957）年に「東帰以後」が未刊歌集として収められているが、1冊として刊行された歌集ではこれが最終である。昭和22年から26年の作を収める。

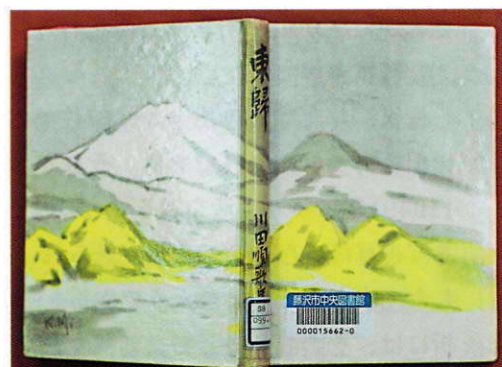
歌集名は、ずっと関西に居住していた順が、関東（国府津）に移住したことによつていふ。

この歌集には、鈴鹿俊子を知り、やがて結婚にいたる間の煩悶を歌った作が収められてあり、敗戦を迎えた老歌人の寂寥感を歌った第12歌集「寒林集」以来の透徹したわびしさの世界に一種の緊張をもたらしている。

佐々木幸綱「川田順」より抜粋



伎 芸 天



東 帰

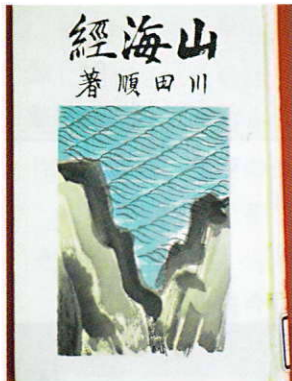
歌集「東帰」より

昭和24年3月末、京都より国府津に移りて

足柄のふもとの田居に膽ふとく新しき生を創めなむとす

移り来て荷ほどき居る縁側を蜜柑やまより人に見られつ

庭さきに七厘すえて煮炊する妻のすがたも目馴れ来にけり



山海経



青淵



旅雁



鵲

(2) 富士山麓、御殿場、裾野と順

① 師 佐々木信綱

明治5(1872)年、三重県鈴鹿郡石薬師村(現在の鈴鹿市)に国学者・歌人弘綱の長男として生まれた。明治21年東大古典講習科を卒業。幼児から作歌ならびに古典を学び、父の学問を継承した。

明治29年雑誌「いささ川」を発刊、ついで31年には現存最古の歌誌である「心の花」を発刊、新派歌人のひとりとして歌壇の有心的位置を占めた。38年以降、東大講師としてながく教鞭をとった。

「思草」・「新月」・「常盤木」・「豊旗雲」・「鶯」等多くの歌集があり、古典研究、特に和歌史や、万葉集の研究に不朽の業績を残した。大正6年、その万葉研究に対して恩賜賞が与えられ、昭和9年には学士院会員、12年には文化勲章を授与された。

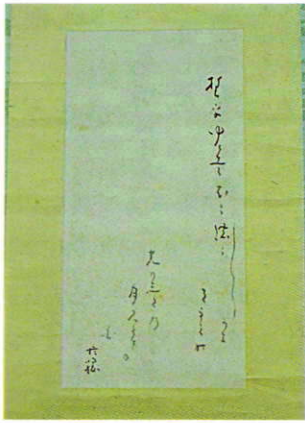
おおらかで重厚な作風をもち、短歌の普及につとめた功績も大きい。歌壇の長老として重きを占めたが、その自由な指導方針から多くの異色歌人を生み出している。

② 佐々木信綱と順

川田順は明治30(1897)年、16歳から佐々木信綱の門家にはいり、翌31年に「心の花」が創刊されると、同人となり創作活動を展開していく中で信綱のほか、石樽千亦、新井洗、木下利玄らを知る。また、順が御殿場市やさらに富士山へと足を延ばすきっかけとなった御殿場市神山の萩倉ちさゑとの交友もちさゑが信綱が主宰する「心の花」の同人であったことがこの二人を結びつける原因といえる。

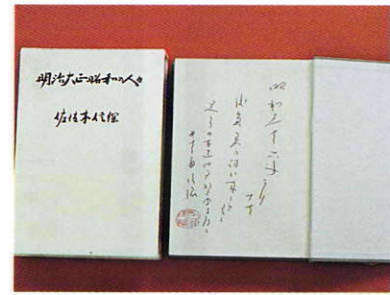
③ 徳富蘇峰と順

徳富蘇峰と順との出会いは、佐々木信綱主宰の「心の花」の同人であった歌人の山下陸奥が順を蘇峰に引きあわせたようである。それから順と蘇峰の関係が深まり、順が関西から神奈川県国府津へ昭和24(1949)年に移り生活を送るようになった折にも、心のささえとなった。5月18日の日付で、川田順夫妻あてに蘇峰から一通の手紙が送られ、当時の川田夫妻の心情をよく理解し、友人としての言葉を書きしるした内容となっていたようである。その1ヶ月後に川田夫妻が蘇峰のまつ熱海伊豆山の晩晴堂を訪問した折には、その記念として夫妻に硯と掛軸を持たせている。川田夫妻が蘇峰宅を訪れた折に、順を本心から迎え、励ます心の動きを見ることができる。川田夫妻宅には、蘇峰からの書簡が届けられている。



佐々木信綱 作(軸)

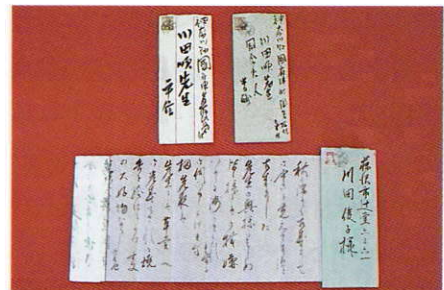
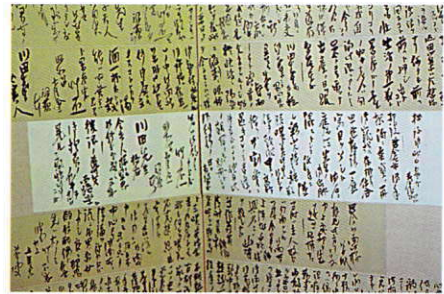
野を行かば
ほのぼののしろし
光の下の
月よみの
月見草の花
信綱



明治・大正・昭和の人々
佐々木信綱 著



徳富蘇峰からの書簡(屏風)



徳富蘇峰からの書簡

④ 川田順と神山萩倉家

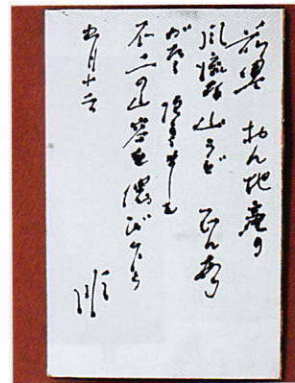
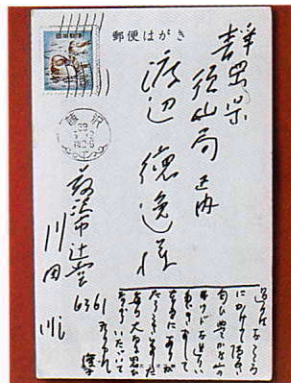
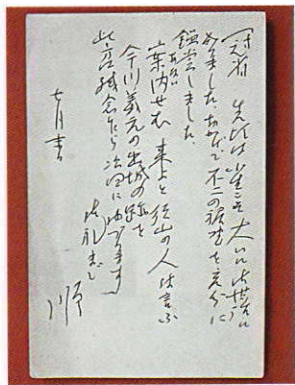
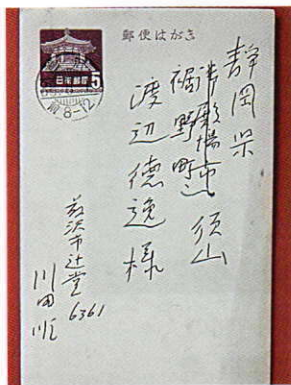
「萩倉家」静岡県御殿場市神山

萩倉家は、御殿場市神山の草分け、居住の地と定めたのは弘安（1278～）年間の初め、700年余り前と伝えられている。

前当主の允予氏の祖父佐平次は神山銀行の頭取であり、母千佐恵は佐々木信綱門家の歌人として知られ、塩川孝、石樽千亦を始め著名な文人墨客の往来が多く、生来の才色兼備と溢れるごとき温情は、たれかれの区別なく敬慕的であった。

萩倉家は、中世に菩提寺と共に災害にあったため、当時眺めが良い丘だった現地を開墾して再建した。200年余り前と伝えられている。以来「あらく」と呼ばれているが、明治の中頃貴人を迎えるため、上段の間は菩提寺の本国寺に、門は復生病院に寄贈され現存している。また、母屋は現在深良に移築されている。

勝田見佐は、千佐恵の妹で、裾野市須山の旧家勝田家に嫁がれていた。この見佐との継がりから川田順が後にかっこうを題材にした作品を残すきっかけとなった須山山口を訪れ、その案内を行った渡辺徳逸（富士山資料館名誉館長）との初めての出会いであり、これを機に渡辺徳逸とのつながりが深まっていったのだろう。その後も順と渡辺徳逸とのつながりが、渡辺館長宅に残る手紙から知ることができる。



冠省 先頃は小生こそ大いに御世話に成りました。
おかげで不二の裾野を充分に鑑賞しました。
案内せむと来よと須山の人は言う
今川義元の出城の跡を
比方は残念ながら次回にゆずります
御礼まで

順

前略 おん地産の
風流な 山うど真に
ありがたく
頂きました
不二の山容を
偲びながら

六月十二日

順

(3) 富士山や御殿場、須山周辺を題材にした作品の誕生

川田順が富士の裾野、御殿場から須山、裾野に足を進めたのは、昭和38年7月と思われる。御殿場市神山の萩倉千佐恵からの「郭公のさえずりを聴きに」という度び重なる便りに応じたものである。

神山の萩倉宅へ訪れた川田夫妻は、早朝から郭公の鳴くのを心待ちにしていたが、その朝は聴くことができなかった。その日の午後萩倉とその妹である勝田見佐と共に、大野原から須山の渡辺徳逸宅を訪ねることとなった。

渡辺宅では、庭先に咲く「定家かずら」に関心を示しながら、渡辺徳逸の案内で大野原の萱原を歩いている。その後茫々とした十里木へ行き、頼朝の井戸を訪れている。また、萩倉宅の近くを流れる黄瀬川も訪れている。

順が訪れた7月20日には、神山萩倉から須山、大野原、十里木等を訪れるなかで、私たちに印象が残る作品を作り上げている。

神山の萩倉家にやどりて

くわくこうの吟まちわふる夕べにて四方乃山よりひぐらしきこゆ 順

昨夜寝ねし家出で来れば前にあり牧水居士の泊りし宿屋

愛鷹の黒岳眉にせまり来てあしがら越の道つきむとす

建久の鎌倉殿の御狩場はぼうぼうとして雲る萱原

鎌倉に着かば斬られむ公卿達の通りし道は夏草の中 (建武中興)

夏服のかくしに入れて帰り来し定家かずらはいまだ凋まぬ

岩間よりたぎち落ちくる川狭し足柄びとは高橋わたす（黄瀬川）

不二のねのふもと萱原はてもなしくわくこう鳴くと耳そばたてつ

〔渡辺徳逸による碑解説より〕

昭和38(1963)年7月20日 山口弁当場にて

この日先生（順）は、御殿場の萩倉、勝田両女史と御夫妻でお出になられた。池畔のテイカヅラを始めて見たと大よろこびだった。

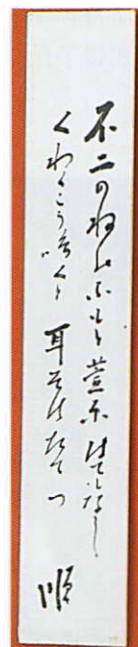
暫く休んで、郭公を聞くために山口から弁当場に案内した。四辺は霧に閉ざされ、広い草原は梅雨季らしく、しっとりとしていた。

一行5人は車から下りて、暫く無言で佇んでいたところ、「アッ鳴く」と最初に聞きつけたのは先生だった。遠くかすかに、霧の中から洩れる郭公の声。私は少々時季がおくれているので心許なく思っていたが、ホッとした。

昭和54年8月8日

渡辺徳逸

川田
順
作
短
冊



(4) 富士裾野大野原と深良に建てられた歌碑

昭和54年秋に、須山山口の忠ちゃん牧場入口に裾野市内で第1番目の順の歌碑が建てられている。この碑は前段ですでに紹介した「不二のねのふもと萱原はてもなし……。」を歌碑として建立したもので、順が神山萩倉家にて昭和38年に作られ、16年目を迎える年であった。歌碑の建立は須山の渡辺徳逸富士山資料館館長が中心となり、富士に学ぶ会と地元の方々の協力によって建立されている。

歌碑建立に先立ち、川田俊子夫人と渡辺徳逸館長とで、歌の選考や建立地や歌碑が刻まれる石材等について打合せや下見が行われ、その年の11月4日文化の日に除幕式が行われた。忠ちゃん牧場の入口に富士溶岩が土壌から洗い出され、その上に土地の安山岩の巨石がしっかりとすえつけられている。

11月4日、除幕式当日は、川田俊子夫人に順の弟子であった池森亀鶴氏と石川富美子氏も前日の3日から同行され、須山の清水館へ宿をとられている。除幕式の当日の朝は雨模様の天候であったが、会場である忠ちゃん牧場に向う途中からしだいに雨が小降りとなり、式が始まる頃には富士が姿を現したのであった。

その時の感想を川田俊子夫人は後に、「黄昏記」の中に書き記している。

あらはれし裾野の地の岩の上に碑ははぢら
へる如くたちたる 俊子

新雪に不二かがやけばただにま向う碑もひ
とときの命光らむ



川田 順 歌碑
(須山山口 忠ちゃん牧場)

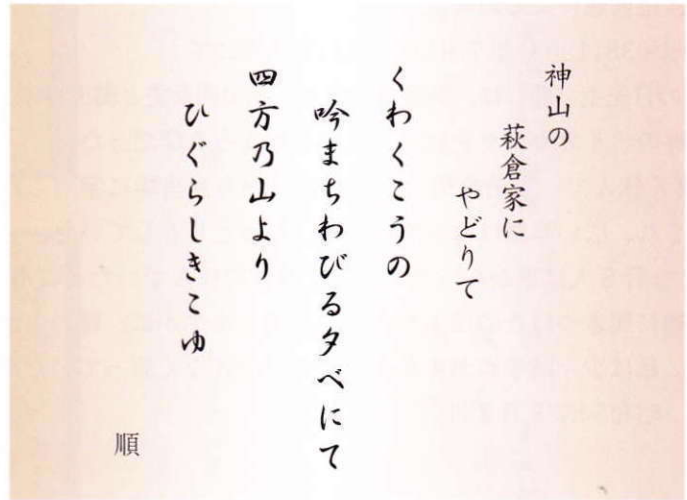
平成5年7月に裾野市内で第2番目の歌碑が建てられている。この碑は、順が昭和38年7月19日に御殿場市神山の萩倉家に宿泊され、かっこうの鳴く声を聴きに訪れた折の歌で、「くわっこうの 吟まちはふる 夕べにて……。」である。

この時に川田順が宿泊した萩倉邸は裾野市深良に移築されており、この地に富士に学ぶ会を中心に、渡辺富士山資料館長、地元深良の方々の協力によって建立されたものである。

7月20日に深良に移築された萩倉邸前庭にて多くの皆様の手によって除幕式が行われた。その中には川田俊子氏をはじめ、神山萩倉家、国語学者の柴田武氏、芸術家の榎戸文彦夫妻等の姿を見ることができる。



川田 順 歌碑
(深良にて)



深良で行われた除幕式



除幕式での川田俊子氏



除幕式での渡辺徳逸館長



歌碑前にて



歌碑前にて



忠ちゃん牧場入口 歌碑前にて

3. 水原秋櫻子^{しゅう おう し}

(1) 俳人 水原秋櫻子

明治25(1892)年10月9日、東京の神田区猿楽町12番地で、水原漸^{すすむ}、治子の長男として生まれる。

本名 水原 豊 (みずはら ゆたか)

明治37(1904)年、独逸学協会学校中学に入学。4年生の秋の修学旅行で日光に赴き「老杉に白雲ゆくや秋の廟」の句を作った。

明治44(1911)年、第一高等学校に入学。野球部に入り、三塁手をつとめた。この頃から、しきりに文学書を愛読し、医学専門書を読む傍ら、若山牧水・与謝野晶子・斎藤茂吉などの短歌に親しんだ。

大正3(1914)年、東京帝国大学医学部に入学。大正7年、たまたま図書館で高浜虚子著『進むべき俳句の道』を読んで俳句に興味を持ち、「ホトトギス」を購読した。

大正8(1919)年、東京帝大法医学教室に新設された血清化学教室研究生となり、三田定則教授の指導を受けた。同期研究生に高野素十がいた。この頃、朝日新聞歌壇窪田空穂選に投稿し、数首入選した。また、血清化学教室の先輩緒方春桐のすすめにより東大医学部出身者を会員とする木の芽会に入会、南仙臥らと句作り、「鯉はねて河面暗し蚊喰鳥」の句が「洪柿」8月号に初めて載った。「洪柿」の句会で松根東洋城の指導を受けた。「ホトトギス」虚子選に「水尾引きて釣船いそぐ秋の雨」が初入選した。

大正9(1920)年、歌誌「朝の光」に加わり、空穂について和歌の指導を受けた。空穂にはその後約2年間師事した。

大正10(1921)年、「ホトトギス」雑詠に秋櫻子の名で4句入選した。秋櫻子の号は仙臥の命名による。6月、ホトトギス例会に出席、初めて虚子に会った。

大正12(1923)年、佐々木綾華の「破魔弓」同人顔合せ会に出席し、しきりに郊外吟行を行うようになり「ホトトギス」での成績も向上した。この年に関東大震災が起き、この頃から短歌を廃し、俳句に専念した。

大正13(1924)年、「ホトトギス」課題選者となり「破魔弓」雑詠選者となる。また、東大付属病院産婦人科教室の助手となる。

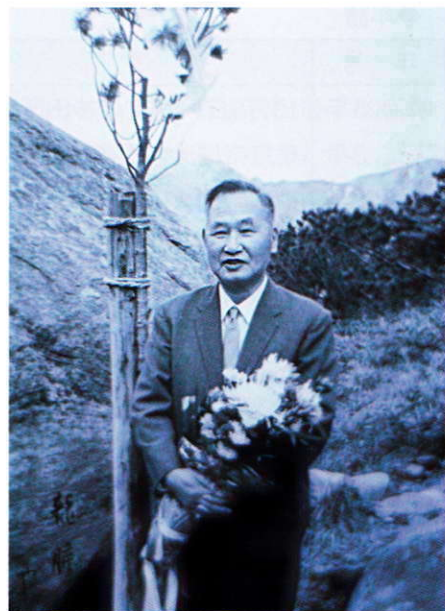
昭和3(1928)年、「破魔弓」を「馬酔木」と改題した。奈良に遊んだときの「馬酔木咲く金堂の扉にわが触れぬ」の句に因む。この年、父の跡を継いで病院長、ならびに水原産婆学校長になる。

昭和5(1930)年、「馬酔木俳句集」を編し、第一句集『葛飾』刊。以後20余の句集を発行している。

昭和6(1931)年、「馬酔木」に「自然の真と文芸上の真」を発表し、「ホトトギス」を脱退し、高浜虚子と袂を分かつことになる。虚子の客観写生の俳句に異議をとえ、叙情性作風を確立していく。

昭和10(1935)年、馬酔木俳句会第100回記念大会を水原産婆学校講堂で開催した。この頃、馬酔木野球部が盛んに試合を行っていた。

昭和16(1941)年、中西悟堂らの野鳥を聞く会に参加し、浅間高原に赴いた。後年、富士山麓の探鳥会に参加し、十里木の「ほととぎす」句などの名句を生み出す端緒になっている。山麓には昭和22年、30年、33年、34年、36年の秋櫻子60歳代に頻りに訪れている。



水原秋櫻子



馬酔木野球部監督秋櫻子

◆年譜

年号	内 容	年 齢
明治25年	10月9日、東京の神田区猿樂町に生まれる。本名、水原豊。父産婦人科医。	0 歳
大正 3年	東京帝国大学医学部医学科入学。	23 歳
大正 8年	東京帝国大学血清化学教室研究生となる。 東京文理科大学教授吉田弥平長女しづと結婚。 東大出身者句会の木の芽会に入会。俳号静夏。「渋柿」で松根東洋城から俳句の指導を受ける。「ホトトギス」の虚子雑詠に入選。	28 歳
大正 9年	「朝の光」で窪田空穂から短歌指導を受ける。「渋柿」を離れる。	29 歳
大正10年	「ホトトギス」の雑詠に秋櫻子の名で4句入選。「ホトトギス」例会で虚子と面会。	30 歳
大正12年	「破魔弓」同人顔合わせ会。	32 歳
大正13年	「ホトトギス」課題選者となる。「破魔弓」雑詠選者となる。「ホトトギス」雑詠欄巻頭を飾る。東大付属病院産婦人科教室助手となる。	33 歳
大正15年	処女出版句文集「南風」発刊。	35 歳
昭和 3年	昭和医専教授になる。神田に自宅、病院竣工。 「破魔弓」を「馬酔木」に改める。	37 歳
昭和 4年	「ホトトギス」400号記念講演会で「俳句における自然描写」と題し講演。	38 歳
昭和 5年	「馬酔木俳句集」を編集する。第一句集「葛飾」刊行。	39 歳
昭和 6年	馬酔木第1回俳句会。 「馬酔木」に「自然の真と文芸上の真」を発表。「ホトトギス」を脱会する。	40 歳
昭和 7年	宮内庁侍医寮御用掛皇太后御係を仰せ付けられる。	41 歳
昭和 8年	「俳句の本質」刊行。	42 歳
昭和14年	奈良・大阪に遊び川田順に会う。喜雨亭の俳号を用いる。	48 歳
昭和15年	日本俳句作家協会が設立され、理事に就任。	49 歳
昭和16年	中西悟堂の「野鳥をきく会」に参加。（青き霧まぶたにすがしほととぎす）の句が生まれる。	50 歳
昭和20年	神田の自宅・病院を空襲で焼失。八王子に仮寓。	54 歳
昭和22年	曾宮一念らと富士の裾野に遊び「波立てて梅雨雲富士をのぼる見ゆ」など6句。	56 歳
昭和23年	長男春郎が神戸康子と結婚する。俳号を秋櫻子に戻す。	57 歳
昭和27年	小説「高浜虚子」を刊行。	60 歳
昭和29年	杉並区西荻窪に新居成り、八王子より転居。	62 歳
昭和30年	須走より籠坂峠を越えて山中湖に遊び「郭公や籠坂越に富士の雲」など8句。	63 歳
昭和33年	山中湖に遊び、「赤富士に雲立つまでは湖涼し」など3句。	66 歳
昭和34年	十里木を訪れ「ほととぎす朝は童女も草を負ふ」など4句。	67 歳
昭和36年	須走から富士2合目で、「営巢帯明けて水無月の富士赤し」など7句。	68 歳
昭和39年	日本芸術院賞受賞。	72 歳
昭和42年	勲三等瑞宝章を授与される。	75 歳
昭和53年	十里木「童女」の句の除幕式に出席する。	86 歳
昭和54年	「水原秋櫻子全集」全21巻完結する。	87 歳
昭和56年	7月17日永眠。	88 歳

(2) 富士山麓、裾野と秋櫻子

～めぐる人々～

秋櫻子は句作に吟行を重視された。高原俳句を始めたのも秋櫻子といわれる。若き日も利根川べりや京、奈良などを訪れ句作りをしているが、大戦後、長男春郎氏が結婚し、西荻窪に移り住んだ頃より医業からも解放され、特に旅をすることが多くなっていった。

ここ、富士山麓は昭和30年代にしばしば訪れている。これは御殿場市森の越の産婦人科医、松本破菫^{はほう}の招きによるものであった。破菫は戦後まもなく妻の二三女、看護長の江藤緋紗子と「馬酔木^{あしび}」に入会し、同じ産婦人科医ということもあり、秋櫻子との交流が始まっていく。

加えて、奇縁にも秋櫻子の長男春郎氏の奥様康子夫人のお父上が破菫と宮崎県と同じ中学の先輩、後輩であったことも判り、両家の交流がさらに深まっていくのである。

破菫は地元御殿場の「わか草俳句会」や「駿東俳句会」の結成に深くかかわり、その句会を自宅で開くこともあった。当時わか草俳句会の若手俳人であった御殿場市深沢在住の小松惟草^{いそう}氏はたまたま来訪していた秋櫻子から懇切な俳句作法の教授を受け、その折「鳥寄せに寄り来てかなし巢立ち鳥」の短冊を贈られている。

秋櫻子は破菫宅や小山町須走の米山館に泊りながら、馬酔木会の会員たちと山麓をめぐり、その自然にふれ、句材の発見に努め、美しい富士の自然を広く俳壇に紹介している。

ある時は、日本野鳥の会の創始者中西悟堂や会員たちと行動を共にされ、山麓の野鳥観察を行い、「鳥寄せ名人」といわれた須走の高田兵太郎の「技」に驚き、その感動を数句に残している。

鳥寄せの会（探鳥会）は南麓の十里木でも開催される。この時、破菫に秋櫻子を紹介され、案内役を努めたのが須山の郷土史家渡辺徳逸（現富士山資料館名誉館長）である。秋櫻子と徳逸の交流がここから始まり、後年「十里木句碑」や「奇石博物館句碑」の誕生を見ることになる。

なお、十里木の鳥寄せ会には馬酔木の会員60名が同行し、16戸の民家に分宿している。

秋櫻子の心を山麓に強く導いた松本破菫は昭和39年に他界。絶筆が「台風に乗ってぼつぼつ出かけようか」として残っている。また、破菫の句碑「三光鳥翔けて入日の五月富士」が三島の加茂川町にある。

破菫がこの世を去ると秋櫻子の山麓訪問の機会もめっきり減り、鳥寄せの会も行われなくなってしまった。

しかし、40年の時を経て、平成15年2月、秋櫻子の令孫であられる徳田千鶴子氏の働きかけにより「馬酔木探鳥会」が復活を見ることになる。多数の会員の皆さんが裾野市の五竜の滝付近に参集し、野鳥の会の滝道雄氏の案内で鳥の生態をつぶさに観察し、句の創作に活かしている。

さらに、この年の7月にはかつて秋櫻子が泊をとったゆかりの須走米山館を基点とした富士山麓の「探鳥吟行」が行われている。

大鷹の炯眼ぐるりと推若葉



復活した馬酔木探鳥会（裾野市五竜の滝）

この時、徳田千鶴子氏が吟じた一句である。



松本破菫（中央）

(3) 富士山麓を題材にした作品

秋櫻子の富士山に対する思い入れは強い。遠望して詠んだものも含め、句の中に富士（不二）の固有名が見えるものは40を越えている。ここではテーマに従い山麓を訪れて歌ったものを句集ごとにあげて見たい。

① 昭和22(1947)年、曾宮一念らと裾野を訪れ詠んだもの（句集「重陽」より）

波立てて梅雨雲富士をのぼる見ゆ
雲隠る嶺ゆゑ大き梅雨の富士
愛鷹の朝雲脱げば麦を刈る
ほととぎす翔けゆく瀧の道しるべ
せまき田をいそしみ植うる瀧の上
古き代の墓あり植えし田の中に

② 昭和30(1955)年、須走より籠坂峠を越え山中湖を訪れたとき詠んだもの（句集「玄魚」）

鳥寄せの口笛くらし霧の音
鳥寄せに近づく霧の三光鳥
鳥寄せに寄りきてかなし巢立鳥
黄びたきのこゑ遮るは霧の羊歯
夜明けてもくらしと夜鷹鳴きつづく
卯の花や籠坂越に雲退き
薊萌え籠坂越は岨緒し
郭公や籠坂越に富士の雲

③ 昭和33(1958)年、山中湖で（句集「蓬壺」より）

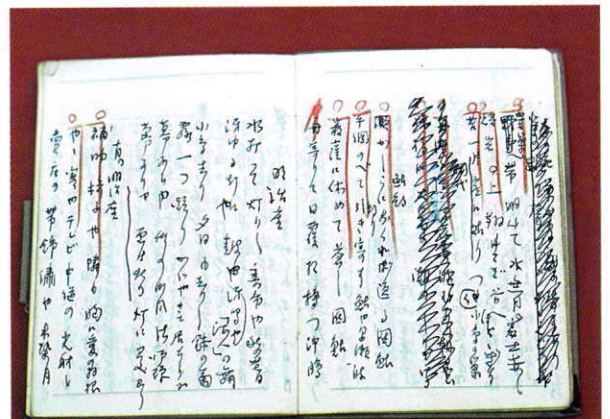
朝の蟬富士のくれない褪せにけり
赤富士の雲立つまでは湖涼し
富士の石室灯ればくらしほととぎす

④ 昭和34(1959)年、十里木鳥寄せ会に訪れたとき詠んだもの（句集「旅愁」より）

鳥寄せをさく扮装や梅雨の間
鳥寄せや夜眼ほのかなる山法師
鳥寄せや不二もうかべる夜半の月
ほととぎす朝は童女も草を負ふ

⑤ 昭和36(1961)年、須走から富士山2合目に遊

んだとき詠んだもの（句集「晩華」より）
ほととぎす寄せ笛に乗りつ又逸れつ
寄せ笛に巢鳥はひそむえごの花
青啄木鳥や草吹きなびく梅雨の霧
鳥寄せのわぎ継ぎ吹くや夜鷹笛
草の香にむせび吹くなり夜鷹笛
菅葉帯明けて水無月の富士赤し
溶岩の上翔けてぞ谷へほととぎす



秋櫻子句帖（富士の句が見える）



須走小富士での探鳥会に参加した
現馬酔木会員たち

(4) 十里木の秋櫻子句碑誕生の経緯

ほととぎす朝は童女も草を負ふ

① 「ほととぎす」句碑建立秘話

富士山資料館名誉館長 渡辺徳逸

私が水原先生に初めてお会いしたのは昭和34年6月20日で、御殿場野鳥の会創立に参画して以来知遇を得ていた松本破菫さんのお薦めによるものでした。

夜の頼朝の井戸の付近には、灰白く夢のように山法師が咲いていました。私としましては、この時は先生「鳥寄せや夜眼ほのかなる山法師」の御句が一番好きでした。

いずれにせよ、私はもうこの頃から先生の句碑がこの地に立てられたらと心密かに企画していました。

たまたま、裾野市においては昭和50年来、富士山資料館開設の計画が進められていましたが、同53年5月8日これが完成を見ると同時に、三島須山口富士登山道が再興したことを機に水原先生にご相談を申し上げ、この「ほととぎす朝は童女も草を負ふ」の句碑が誕生することになりました。

② 「ほととぎす」句碑除幕式

昭和53年10月1日、午前11時、水原先生ご夫妻のご臨席をいただき、一同感激のうちに次のような式次第でとり行われた。

司 会	高橋具美
一、開 会 の 辞	裾野俳句会 森本雅堂
一、経 過 報 告	裾野市中央公民館館長 城所勝郎
一、祝 詞 奏 上	佐野原神社 二宮正元
一、除 幕	水原先生曾孫 徳田洋之・紀子・暢宏
一、碑 文 朗 詠	霊峰富岳会 広石剣岳
一、花 束 贈 呈	十里木区長令孫 横山久恵
一、お祝いの言葉	須山小PTA副会長 土屋弘海
一、鼓 笛 隊 演 奏	須山小児童 60名
一、来 賓 祝 辞	裾野市長 市川 武 文化協会会長 原 隆司 市教育長 芹沢茂一 馬酔木会会長 原 柯城
一、謝 辞	水原秋櫻子
一、閉 会 の 辞	裾野俳句協会 高橋具美



渡邊徳逸と水原家の人々(平成15年10月)



謝辞を述べる秋櫻子

③ 除幕式後の記念俳句会

式の終了後、十里木公民館において記念俳句会が開催された。受付者数、実に176名の盛況であった。秋櫻子先生は十里木館で少し休憩されたあと、お元気で帰京された。

●十里木記念俳句会受賞者

- 秋櫻子特撰

高橋	北斗
福永	耕二
古賀	まり子
- 市長賞など

小野	恵美子
高橋	嘉子
渡辺	英子
駒沢	たか子
植松	靖



除幕式並びに記念俳句会案内図

④ 句碑建立の推進力となった方々

- 手綱 拓史 (市小中PTA連合会長)
- 杉山 定久 (南富士産業株式会社専務)
- 渡辺 吉己 (裾野市役所)
- 手島 靖一 (馬酔木俳人)
- 野元 蘆子 (同)

⑤ 除幕式当日をふりかえって

馬酔木会員 田中敦子

秋櫻子先生の72番目の句碑が、先生とお知り合いの渡辺徳逸様の企画で10月1日、静岡県裾野市十里木の山毛櫨の森に、地元の裾野文化協会によって建設されました。

ほととぎす朝は童女も草を負ふ

根府川石に彫りこまれたこの俳句は昭和34年10月号の「馬酔木」誌上に、富士山麓十里木にての作品4句の中の1句として発表されたもので、「秋櫻子全集」第4巻句集4の「旅愁」に収められています。



除幕する秋櫻子御曾孫

私は女学生の頃、はからずも十里木に近い富士宮市に疎開しておりましたので、この4句の印象はとくに強く、音唱して一瞬、青春の日を過ごした故郷の風景がよみがえり、臉に描いては先生の俳句の清新な美しさと楽しさに魅せられたことを今も思い起こします。

俳句に深入りするようになった頃、私はひたすらに先生の俳句に惹かれて、その背景や土地を訪ねました。ここ十里木へも、しばしば吟行したものでした。御殿場からバスで20分、須山地区を過ぎると果てしない溶岩地帯、しかも生い茂る自然林に眺望がきかず心細くなってきたころ、急に

道の左右に開けた所が十里木地区であります。地区の正面に見える宝永火口は距離が近いだけに、富士山の厳しい自然の姿として迫り、私がひきつけられたようにぼんやりと佇んでいると竹籠を背負った山畑通いの婦人に声をかけられました。

句碑びらきの日、富士の大野原に風は少し強うございましたが、薄や風露草、松虫草の花が美しく咲き揺れて黄葉をはじめた山毛櫨の森に、先生ご夫妻とご家族をお迎え致しました。除幕は先生の曾孫、洋之さま紀子さま暢宏さまの本当に可愛らしいお手により行われました。にこやかな先生ご夫妻のお元気なご様子を拝見して喜びと感激で胸がいっぱいでもございました。

(5) 富士宮「奇石博物館」句碑誕生の経緯

青き霧まぶたにすがしほととぎす

① 句碑傍らの説明文より

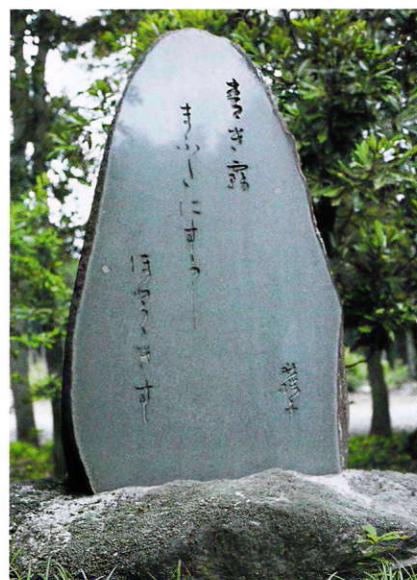
この句は秋櫻子が昭和16年に詠んだものである。日本野鳥の会の知人らとともに富士山南麓の十里木を訪れた秋櫻子は親交のあった須山の渡辺徳逸氏にこの句を短冊に認めて残した。

その後、渡辺徳逸氏はこの天母山周辺がこの句の情景に相応しいところから、石の博物館に短冊を譲り、苑内に句碑を建立することとなった。

句碑は秋櫻子自筆の短冊をもとに彫られ、水原春郎夫妻をはじめ馬酔木会員150余名が見守る中、しづ夫人と曾孫の手により除幕された。

秋櫻子102番目の句碑である。

なお、句碑背面の秋櫻子略歴は東京大学名誉教授で言語学者の柴田武氏による。



奇石博物館「青き霧」句碑

- ◆句碑の石材 伊豆天城の安山岩で柿の木石と呼ばれる。
- ◆台座の石材 富士山の玄武岩で大沢石と呼ばれる。
- ◆文字彫り 吉川祥嗣 長泉町吉川石材

② 奇石博物館句碑除幕式

日 時：昭和63年10月1日

式次第

- | | |
|------|--------------------------|
| 一、除幕 | 水原秋櫻子夫人・曾孫 |
| 一、朗詠 | 馬酔木会員 若林道江 |
| 一、報告 | 石の博物館長 酒井陽太 |
| 一、祝辞 | 東大名誉教授 柴田武
馬酔木副会長 有働亨 |
| 一、挨拶 | 馬酔木主宰 水原春郎 |



左より柴田武、渡辺徳逸、酒井陽太各氏

③ 当時の新聞記事より

昭和63年10月2日 静岡新聞

富士山麓では二つ目という俳人水原秋櫻子の句碑が富士宮市天母山の奇石博物館の庭に完成し、一日、秋櫻子夫人のしづさん（88）や県内の馬酔木同人ら150余人が出席して除幕式が行われた。

句は「青き霧まぶたにすがしほととぎす」で、昭和16年浅間高原で詠んだとされている。裾野市立富士山資料館の渡辺徳逸館長が短冊を持っていたが、奇石博物館周辺の景観が句の情景に似ているといふので寄贈した。碑はブナやクヌギの落葉樹を通して富士山の雄姿が望める中に建てられた。

長男で「馬酔木」を主宰する水原春郎氏が「御殿場から西富士にかけては句碑が多い。句碑巡りをされるのも面白い」とあいさつしていた。

(6) ありし日の秋櫻子



幼き頃の秋櫻子 (右)



秋櫻子夫妻と子どもたち



東大野球部レギュラーとして



しづ夫人と秋櫻子



芸術院賞受賞記念撮影



くつろぐ秋櫻子



硯をする秋櫻子



病院長 秋櫻子

(7) 秋櫻子愛用品と作品など（水原家所蔵）



硯と墨



印鑑と朱肉入



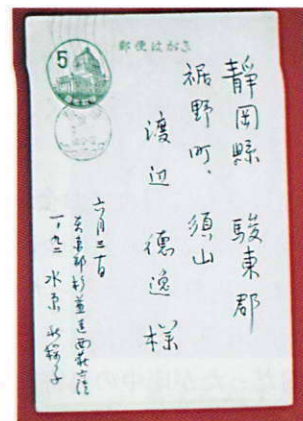
秋櫻子作色紙（米山 彰氏所蔵）



秋櫻子作「川魚と海老」



秋櫻子作「白桃とほととぎす句」



秋櫻子から徳逸への書簡



「富士」の短冊



秋櫻子が徳逸に贈った歳時記

(8) 馬酔木平成15年12月号より

「百三歳の渡辺翁」

主宰 水原春郎

10月8日、裾野市立富士山資料館で渡辺徳逸名誉館長におめにかかった。3年前の10月15日の紀寿祝（百歳の祝）でお会いして以来のことである。腰が曲がられてはいるが、杖を握って一步一步ゆっくりと運ばれる足許に乱れはない。確りとしたお声で現在の生活を語られた。ずっと御一人暮らし、自炊していらっしゃる。起床は6時。まず裸になって乾布摩擦、散歩、猫、犬（近所も含め）の餌やりが朝の日課。それ以外は机に向い、自分史を書かれておられるという。就寝は11時。昼寝は椅子に座ったまま5分間位まどろむことを適宜にと正に理想的なおくらし。近頃本棚から辞書などの重い物を取り出すのがつらいと仰るが、それは私も同じこと。



談笑する春郎氏と徳逸氏

話は渡辺さんの命をかけた2つの仕事へと進む。ひとつは永年難渋していた須山地区の飲料水の解決。これには国が決めた地下150mまでの規制を、もう50m深く掘って良いと許しを得た努力が報われ、180mの地点で待望の水が出たという。聞いている私共も思わず手に力が入ってしまう。その2は約85年振りの富士山須山口登山歩道の復活である。日本山岳会員（現在は名誉会員）であり、富士山をこよなく愛して居られる氏にとっては登山歩道復活の日の散策会は忘れ得ぬ思い出となったろう。

渡辺さんが富士山と故郷にこれだけ尽くされたのは思いもかけぬ不幸がきっかけであった。

学生時代の大病で勉学の道が閉ざされ、生まれ故郷の自然の中で静養する以外に生き延びる道はないとの東大田坂教授の説得に従い、須山に戻り私財を投じて青少年の教育に自分の夢を託された。今考えて見ると、その判断は正しく、氏は103歳という長寿を与えられ、また故郷にも大きな仕事を残されたのだ。

さて、父が渡辺さんに初めてお会いしたのは、昭和34年6月20日のことである。この日、十里木で鳥寄せ吟行会が催された。この会を企画されたのが御殿場で産婦人科医を開業されていた松本先生。俳号を「破菟」と言われ、馬酔木会員だった。破菟さんと渡辺さんは日本山岳会員として昵懇の間柄、その御縁で鳥寄せの名人高田さんを紹介して下さった。

当日は偶々雨だったが雨中の鳥寄せで作った父の句「鳥寄せや夜眼ほのかなる山法師」に渡辺さんが痛く感激し、後日どうにかして十里木に句碑をと考えられたようだ。その念願が20年後の昭和53年10月1日に叶えられ、十里木の頼朝の井戸の森に建立された。句碑に刻まれた句は「ほととぎす朝は童女も草を負ふ」である。

渡辺さんの御養子の杉山末雄さんは当時を振り返って、「昭和30年代の十里木では各家でまだ馬を飼い、その飼料として秣をやっていました。十里木の子ども達は朝学校に行く前に家の手伝いで、父親の刈った秣を背負子で運んでいたのです」と語られている。

私と渡辺さんとの初対面は恐らく句碑のことでわが家にいらっしゃった時だったかと思う。その時既に80歳近くでいらっしゃったのだが、何時お会いしても変わらぬお元気さには只々驚くばかり。お土産に「庭にできた巨峰です」とつみたての葡萄を頂戴した。とても甘く清々しい味だった。

(9) 来館された方の俳句作品

今回の特別展にはたくさんの俳句関係者が来館された。

秋櫻子のご子息で馬酔木を主宰する水原春郎氏ご一家のご訪問は特筆大書すべき事柄であるが、ほかに、秋櫻子が育てた浜松の百合山羽公門家の俳人や、かつて秋櫻子が山麓を訪れたとき俳句作法の手ほどきを受けた小松惟草氏が属する地元の「わか草俳句会」の俳人など大勢の方々である。

その方々がかつて詠まれた富士山麓の句や今回会場で作られた句を短冊にしてこの特別展に寄せてくださったので感謝の意をこめて順不同でここに掲載させて頂きたい。

大富士の白炎となる初旦	春 郎
草負ひし童女はいずこ木の実降る	春 郎
大鷹の炯眼ぐるりと椎若葉	千鶴子
補聴器に富士の蛸捉へけり	春 醜
秋の蜂かぼそき命支えをり	惟 草
頂をいくたび隠す富士の霧	新 一
初富士のころゆくまで裾を曳き	市 江
見馴れたる富士を見に出る大旦	市 江
もてなしの富士でありしを時雨けり	喜美代
富士に湧く雲の自在も野分あと	真 里
郭公や富士より晴るる朝の雨	絹 代
星涼し富士の室の灯殖やしつつ	たみ子



来館者寄贈の短冊

(10) 山麓を詠み継ぐ

草負ひし童女はいずこ木の実降る

はるばる東京杉並より秋櫻子のご子息で馬酔木を主宰する水原春郎氏が康子夫人やお嬢様の徳田千鶴子氏とご一緒に特別展開催中の10月8日に来館された。

この日、春郎氏は20数年ぶりに十里木頼朝の井戸の森の秋櫻子句碑も訪ねている。冒頭の句はその時に氏が詠んだものである。

かつて、父秋櫻子がこの地を訪れて詠んだ

ほととぎす朝は童女も草を負ふ

の句を受け、目前の情景と氏の心象風景とを重ねて歌ったものと思われる。時代の変化や移り行く季節への寂寥感が胸に迫りくる佳句である。

秋櫻子から春郎氏へ、更には徳田千鶴子氏・現馬酔木に属する俳人たちにより富士山麓が脈々と詠み継がれていることは山麓に住む者にとり、まことに誇らしいことである。

語り継ぎ、言い継ぎゆかむ、不盡の高嶺は……。



富士に対す水原春郎氏



頼朝の井戸の森冬景色

Ⅲ. 身近な富士山の歌

日本の名山富士山その富士山は、童謡や唱歌、歌謡曲等に登場し私たちに馴染み深い校歌は、懐かしささえ感じさせてくれます。数えきれない富士山の歌を、今回は校歌を通して富士山はどのように歌われているかをご紹介します。校歌による富士山の歌われ方はさまざまです。富士山の優れた風姿を「富士を手本に」「富士のように」と学校の教育徳目として歌っている。優れた自然景観として歌にとどめないで、古典時代以来富士山への敬仰心を、詠歌作法にまで昇華させてきた日本人の伝統的美学が、現代の歌に現われています。

1. 校歌に歌われた富士山（静岡県・山梨県で富士山麓周辺の小・中学校の校歌を紹介）

静岡県（東部地区）の富士山が歌われている校歌

(1) 裾野市

裾野市立東小学校（1番）

明るい空に そびえたつ 霊峰富士の 裾野市の 東にさんと そそりたつ あゝうるわしの
学び舎は 誇りある 我が母校

裾野市立西小学校（2番）

世界が仰ぐ富士の山 越えるは二つ 朝かぜと 希望にもえる 西小と ああ憧れの 羽ばたきを
空にはればれ さあ発とう

裾野市立深良小学校（1番）

そびえる高嶺を 朝に仰ぎ せせらぎも清い 黄瀬川の流れに 夢あり詩あり 歌もあり 自由の旗に
腕くんで かたみにはげむ 深良の子 われら

裾野市立富岡第一小学校（1番）

富士山おはよう 朝の道 元気な声を かけあって みんな楽しく 今日も学ぼう 光のなかの
自然の子だよ ラララララララ 富岡第一小学校

裾野市立富岡第二小学校（1番）

そびゆる富士の 気高さを 白亜の窓に仰ぎつつ 知識を磨き たゆみなく 学びの道を いそしまん
育つわれら 富岡第二小

裾野市立須山小学校（2番）

いろどる空に 朝あおぎ ゆうべは祈る 富士がねや 夏冬すがた かわるとも われらは学ぶ
けだかさを

裾野市立向田小学校（2番）

歴史の流れを みつめてる 富士山なにを 思ってる やさしくみんなを 護ってる 向田小学校
僕等の生まれた 小さな星よ 地球という名の ふるさとよ 心を開いて 語れ 明日の夢

裾野市立千福が丘小学校（2番）

心の底から 大きな声で さげんでみよう 丘のかなた YES I CAN SING ALONG
夕焼け富士を仰いで 一番星みつけた 優しい心育てて 夢を描く 千福が丘

裾野市立東中学校（1番）

東雲の 空美しく 七色に 映える富士の嶺 ゆるぎなき 尊き姿 わが艦 清純常に
あゝ 東中我らが母校

裾野市立西中学校（1番）

よろずのものにさきがけて 朝日を浴びる富士が峰 きびしき冬も夏もまた 強く正しくたえしのび
そのふもとにぞ清らかに 生い立ちにけり富士いばら

裾野市立深良中学校（1番）

朝に富士の気を慕い 夕に箱根の香を受けて 四季のうるわしきわが深良 胸に希望の輝きて
春繚乱の花のごと 抱負みなぎる深中生

裾野市立富岡中学校（1番）

自由の翼 音高く なるや 富岡中学校 雲にそびゆる 雪の嶺 けだかき富士は 我がかがみ
あゝ 濁世をよそにして 清きは 誰の心ぞや 清きは 誰の心ぞや

裾野市立須山中学校（1番）

朝な夕なに富士を仰ぎて 強くやさしく友あたたかく けだかくのんびり清らかに
おお須山中学心のふるさと

(2) 小山町

小山町立成美小学校

天地も 平和に あけて 朝夕に 仰ぐ 富士嶺 伝統の 輝く 成美 誇りある 我等が学舎

小山町立明倫小学校

富士はかすんで 沼城平 さくらがさけば 水菜ももえるよ 仲よく果たす 責任に 春風そよそよ
鮎沢川の瀬をこす波も あたたかい

小山町立北郷小学校

宝永の 灰の降る中に 汗できずいた みくりやの 父祖のその意気 胸にして 強く生きよう
たくましい 村の力と なるように

小山町立須走小学校

みどりの丘の 学舎の 窓からあおぐ 富士の山 教えをまもり 道をきき けだかい心を 学ぼうよ
須走小学 よい学校

小山町立小山中学校

天には富士の高きあり 地にはわれらの若きあり 希望の色の群青深く 輝く金糸の校旗のもとに
親愛つどえり小山中学

小山町立北郷中学校

真澄の青空はるばると 姿やさしい大富士や ああおおらかにあけてゆく 樹の間に光る学び舎は
我等の誇り 北郷中学

小山町立須走中学校

見よ照りはゆる 霊峰の 光と共に幸あり 我等 誠を胸に 知をみがき 正しく強く いざはげまん
須走須走須走中学校

(3) 御殿場市

御殿場市立御殿場小学校

青空高き 芙蓉峰 ゆかりも深き 御厨の 形勝の地に そそり立つ 校舎に学ぶ 楽しさよ
振え御殿場おお我等が学舎

御殿場市立御殿場南小学校

ふもとの道は朝つゆ光る道 手に手をつなぎ 青空呼べば やさしくほほえむ 友愛の像
あの顔この顔みどりの子どもだ みんな輪になれ 富士の子だ 御殿場南小学校

御殿場市立富士岡小学校

みどりの丘の 朝やけに 清らに映える 大富士の おおしき姿 仰ぎ見る わが学び舎の うるわしき

御殿場市立神山小学校

朝は朝富士 夕あかね富士 われら日に 見あぐる空に 尊き峰はみずから示す けだかく清く
雄々しき生命

御殿場市立原里小学校

見上げる空に 富士がある 日本一の 原里で 豊かな夢を 学んで行こう 白く輝く 未来のページ
真夏の光に みんなで染めよう

御殿場市立玉穂小学校

ほのぼのと 明けゆく空に そびえたつ 富士を仰げば 心おどる希望の光 希望の光
玉穂 玉穂 我等の学び舎

御殿場市立朝日小学校

朝の光の中を 歩いてゆくと 今日心も 大きくなる 富士山そびえる 御殿場の朝日小学校
ここで学んで 友だちと いつも仲良く 生きてゆくよ

御殿場市立印野小学校

朝な夕なに 見上げては そびえて高い 富士の山 果てなく夢も はばたいて ああ 印野小学校
明るく強く おおらかに

御殿場市立高根小学校

朝日輝く 富士が嶺や 夕日に映える 箱根山 花も清らに 咲きにおう 高根高根 富士の高根
ああ美わしの 学び舎よ

御殿場市立御殿場中学校

ふもとにあれば あけくれに いよよしたしき 富士ヶ嶺や 平和のすがた とこしえに
きよらにすめる 立ち姿 正しく立つべし 今ぞわれら 御殿場中学 栄あれ 力あれ 光あれ

御殿場市立西中学校

きおい立つ群山統べて おおらかに富士そびえたり 見よ味爽の生气満てるを
われら新興の意気高らかに いざ とともに いざ 祖国の文化 創らんのぞみ 友垣五百 ここに集えり

御殿場市立南中学校

若きいのちに新雪の 富士もほほえむ 呼んでいる 進取のころは 日々燃えて
ふもとの大地を踏みならす 手と手を結べ いざ友よ 御殿場南中学校 今日歩まん わが母校

御殿場市立高根中学校

ほのぼのあける 大富士を 親しく日ごと あおぎつつ ああ そそりたつ学舎は 高根中学
我らの誇り

御殿場市立富士岡中学校

目路もはるかな大野原 朝夕富士を仰いでは 日毎楽しく新しい 平和のリズムかなでゆく
我等の幸をほころうよ

御殿場市立原里中学校

朝夕に 仰ぐ富士が嶺 清らなり 大沢の川 純正の 若き心に 勢い立つ 直き学園 原里中学
おお 我等が母校

静岡県立御殿場養護学校

富士光る ふもとに学ぶ よろこびに 笑顔いっぱい 手をふれば 強く明るく がんばれと 富士が
答える さあやろう
(PTA) この子らの 生命はぐくみ 健やかに 育つねがいに 生きる日々 支える力 ともどもに

(4) 富士市

富士市立吉原小学校

富士の高嶺を 雲井に遠く 田子の浦曲を 近くに眺む 無双の勝地に わが校立てり

富士市立今泉小学校

富士さわやかに 空高く 仰いでうたう合唱に 新しき日は 晴れわたり われらが心 ふるいたつ

富士市立伝法小学校

みどりのすその ひろびろと そびえる富士を 朝ゆうべ まちかに仰ぐ わが郷よ あかるく清く
ともどもに 伸びゆくわれら わが友よ

富士市立吉永第一小学校

美しく たかく やさしく 穆清の ころ そのまま 富士が嶺は 空にかがやく この窓に 学ぶ
うれしさ この庭に 遊ぶ たのしさ きぼうあり 今日もしむ

富士市立吉永第二小学校

富士の高嶺の気高さを 心の糧と仰ぎ見る 吉永二小の名も高く 学びの誉あげようと 明るく
ともに手をとろう

富士市立東小学校

七色の光にはえて 富士は呼ぶよ 清らかに 伸びゆくいのち はつらつと 正しく強く 生きる子の
学ぶ吉原 東小

富士市立須津小学校

富士の嶺に 雪晴れて 行きかよう 雲は白し 朝鳥の 朝かけるごと はつらつと あふるるちから
友よ明るく 誇りもて 見も魂も鍛えん あゝ われら 須津小学校

富士市立神戸小学校

大富士晴れて 窓ひらく 学びのにわに 朝がきた ひな鳥われら 声あげて 希望のうたを
うたおうよ きれいな 神戸小学校

富士市立元吉原小学校

東海の み空高く 富士晴れて 雲光る時 わが幸福は 胸にあふれ はつらつと 希望の翼
学窓に羽ばたく ああ 元吉原小学校

富士市立原田小学校

見あげる富士 この高さを 駿河の海 あの広さを 胸いっぱい に うけとめて きょうも元気に
まなぼうよ

富士市立大淵第一小学校

晴れた空には 富士清らかに みどりの木々に 朝風そよぐ われらはともに 手に手をつなぎ
日ごといそしむ 学びの庭よ たのしい 大淵第一小学校

富士市立富士第一小学校

滔々として 流るる 富士の 早瀬は 吾等が 強き 心の 表徴

富士市立富士第二小学校

朝に仰ぐ 富士のみね タベに聞くや 波の音 富士を名に負う 学びやに 学ぶ友垣 肩をくみ
手に手をとって 学ぶなり

富士市立田子浦小学校

群れ立つ山を ふまえつつ み雪さやけく 大空に 聳えて立てる 富士が嶺を 朝に父と 仰ぐなり

富士市立岩松小学校

朝夕 富士を仰ぎつつ 知徳をみがき 身をきたえ まことのひと ならめやと いそしみはげむ
たのしさよ

富士市立鷹岡小学校

仰げば崇高し 富士の高嶺 望めば長開けし 田子の浦曲 霞は棚曳く 久沢の丘に 我等が学び舎
そそりて立てり

富士市立広見小学校

海は南にひかりをひろげ 富士のすそのに風はわたる ゆたかな心そだてつつ まなぶ広見の丘の上

富士市立丘小学校

富士をせなかにくっきりと みどりの中に生まれでた ひろい校舎は丘の子の 大きな夢のわくところ

富士市立富士見台小学校

大きな富士が きょうもまた 北の空から みつめてる ここはぼくが ここはわたしが
希望を抱いて学ぶ城

富士市立富士南小学校

明日はのぼる 富士山の あの峰染めて 空染めて ききょうの里の 歴史から 勇気と努力を
学ぼうよ 希望の窓 ぼくらの学校 富士南小学校

富士市立天間小学校

伸びよ かぎりなく 白雪の 富士を越えて 豊かな天間の若い芽が 今 育つ 芽吹く命
あふれる希望 ああ われらの天間小学校

富士市立吉原第一中学校

芙蓉の国に雲晴れて 自由の鐘の高鳴れば 歓喜の調べ朗らかに 真理の扉開かれて
情操の花咲き薫る 友よいざ友よいざ進まずや

富士市立吉原第二中学校

希望の丘に 風薫り まぶたに親し 不二ヶ嶺 みどりのこかけ きみとぼく 花咲くいずみ
わたしとあなた われら行く この道を行く われら われら 日本の 未来

富士市立吉原第三中学校

さみどり草は萌えて れいろうと富士映ゆる丘 大いなる希望を胸に 健児われらここに学ぶ
進みゆく時代と共に 明るく直くひとすじに励まん ああ 吉原第三中学校

富士市立吉原東中学校

富士の高嶺と 名も高き 岳南の地に そびえたつ 文化の礎え 咲かず朋友 おお 我の東中

富士市立元吉原中学校

若い生命が 明るく燃える 希望の青空 濃青の海原 夢大らかに 富士が嶺の叡智の姿 澄むところ
庭あり自治の 花ひらく 元吉原よ かがやく母校

富士市立須津中学校

富士に垣なす 愛鷹の 尾根をひたして 湖ありき 湖をも尾根も 耕して 野面はるかに 深みどり
我等が 里の基せし 父祖の偉業のしのばるる

富士市立大淵中学校

青空高く そびえ立つ 芙蓉の嶺に 雲白し 美しこの郷 大淵よ 理想の道を ふみわける
若きわれらに 希望あり

富士市立富士中学校

希望の海をめざしつつ 富士の早瀬のひとすじに 自由の歌を 奏でつつ 進まん直なる心より
まことの道を拓くべし 母校富士中のはらからよ

富士市立富士南中学校

白雲たなびく天に 富士が嶺のかがやくところ 岳南ここぞ新しき 日本の鼓動
健児われら理想は高し 励み合う明るい声が 学び舎の窓に庭にみなぎるよ あゝ富士南中学校

富士市立田子浦中学校

ああ空の青 海の青 光みなぎる 東海の 健児七百 眉をあげ 仰げば高し 富士の嶺

富士市立岩松中学校

学びの窓に 朝夕に 仰ぎ見る 富士の高嶺は 我等が不動の 心のしるし

富士市立鷹岡中学校

黎明の鐘 鳴りわたり 希望の光 輝やける 自由が丘 学び舎に 崇高き富士を仰ぎつつ
学ぶ我等に 幸多し

富士市立岳陽中学校

広がる裾野は 空青く そびえる富士は麗しき 真理を究め 道拓く 若きわれらが 陽に映える
岳陽 ああ 岳陽 われらが岳陽 ここに在り

富士市立吉原北中学校

輝く命ふかぶかと たたえた富士の気高さを 朝に夕べに仰ぎつつ 山風かよう学び舎に
豊かな心育てよう

(5) 富士宮市

富士宮市立東小学校

芙蓉の峰の 崇高さを うつして清い 御手洗の 流れを己が 鑑とし 心ゆたかに おこないの
正しい人と なりましょう

富士宮市立黒田小学校

南にのぞむ 駿河湾 北にそびえる 富士の山 永い歴史を ふみこえて われら雄々しく
進みいこう 黒田 黒田小学校

富士宮市立大宮小学校

大空高く そびえたつ けだかき富士を あおぎつつ 知識をひろめ 身をきたえ 力を合わせ
手をとって たゆまず共に いそしめる われらが母校 光あれ

富士宮市立沼久保小学校

風さわやかな 朝ぼらけ 大空たかく 富士山 雲をなびかせ 雪に映え 明るく清く そびえたつ
希望の光 ここにさす われらが沼久保小学校

富士宮市立大富士小学校

朝日に輝く富士の峰 今日も仰ごう胸張って みんなで考え たしかめて 高い理想の 育つ丘
ああ大富士小わが母校

富士宮市立白糸小学校

千石に輝く 富士の嶺を 我が学舎の 庭に見て いや新しき みおしえを 学びつ励む われら幸
学びつ励む われら幸

富士宮市立上野小学校

清らかに 芙蓉の峰の影うつし 泉流るる丘の上 遠き歴史をうけつぎて 若き命のすこやかに
伸びゆく 上野小学校

富士宮市立富士根南小学校

富士の高嶺の け高さを 学びの窓に 仰ぎつつ 知識を磨き 身を修め 正しき人と なるめやと
共に誓わん 我等いざ

富士宮市立富士根北小学校

けだかき富士を 朝夕に 窓辺に近く 仰ぎつつ 学ぶ ぼくたち わたしたち 胸に希望の
胸に希望の 鐘がなる 富士根北小わが母校

富士宮市立北山小学校

富士のふもとに そびえたつ わが北山の 小学校 明るく 清く 直かれと 互いにみがく 人の道
北山 北山小学校

富士宮市立貴船小学校

富士はそびえて もえ立つ春に わき出る水も 明るくぬるむ 強く正しく 元気にはげむ
楽しい貴船 われらの母校

富士宮市立富丘小学校

中里山に 秋深み 白雪富士の 夕映えを 心の花と 咲かせゆく めざす理想の 学び舎は
われらが われらが 富丘小学校

富士宮市立富士見小学校

真近くに仰ぐ富士のみね 弓沢川がおしひらく 扇の要に立つ母校 山風海風合うところ
のぞみは高くむねをはり 学び合わなん富士見小

富士宮市立井之頭小学校

東の空にそびえたつ 大きな富士のけだかさを 胸にきざんで学ぼうよ 雪にも風にもまけないで
おお井之頭小学校

富士宮市立山宮小学校

千古の雪を いただいて 国の鎮と そびえたつ 気高い富士を 仰ぎ見て 体をきたえ 心ねる
我等の学び舎 ああ 山宮小学校

富士宮市立上井手小学校

きらめく朝の光に 頬をそめて 富士の峰を まっすぐ仰ごう 手をつなぎ 輪をつくり
清らにつどう 上井手小の 子どもたち

富士宮市立人穴小学校

東にせまる富士のねに 両手を高くよびかける 朝日のみねの輝きと ひそんだ生命身にうけて
学んで育つ 人穴小

富士宮市立富士根南中学校

窓辺に富士の 高嶺をあおぎ まちかに田子の浦回をのぞみ 気は澄みわたる 緑が丘に 輝く学び舎
富士根中 我等が母校

富士宮市立富士根北中学校

朝やけの 富士の高嶺に ゆきかよう 白雲の影 おおしくも 鎮める姿 ああわれら 自主と
自立のほこりもて 進まんわれら 富士根北中学校

富士宮市立井之頭中学校

秀麗富士の 西のすそ 清冽の水 湧くところ みどりの風に さわやかに 白律の旗を ひるがえし
われらが母校 富士宮井中

富士宮市立上野中学校

上野の丘に 日がのぼる 窓に平和の鐘が鳴る 富士と並んで 真澄の空に 理想は高く ひるがえる
上野 上野 わが母校

富士宮市立富士宮第一中学校

富士の高嶺の気高くも 平和の光かがよえり 文化日本の建設の 高き理想をめざしつつ
進み行くべし 友よいざ

富士宮市立富士宮第二中学校

富士の嶺の 高き姿を 朝夕に まどべに仰ぐ めぐまれし 我が学園は 富士宮 第二中学校

富士宮市立富士宮第三中学校

白銀とかす 富士の峰 東の空に 雲をつらぬく すがしき御山を 仰ぎて共に 三とせの春秋
学びの窓に 我等ははげむ 母校その名は 富士宮三中 ああ 三中

富士宮市立富士宮第四中学校

富士の高嶺の 精うけて 恵みに育つ 富丘の 健児に宿る 鉄の意志 郷土建設 我等が理想

富士宮市立北山中学校

青雲高く れいろうと 窓辺に映える 玉芙蓉 歴史を誇る 名刹の 杉の老木に 風清し 強く
明るく 励みゆく 我らが北山中学校

富士宮市立西富士中学校

仰ぐ富士の嶺 朝日に映える 澄んだ青空 我らのこころ 伸びゆく若木よ 共に競わん 西富士中の
我らが歩み

(6) 富士郡

芝川町立芝富小学校

千歳の雪をいただきて 高くそびゆる富士の嶺の 姿を見ればおのずから 心にちりもおかぬなり

芝川町立内房小学校

霊峰富士を仰ぎつつ 流れも速き富士川の 辺にはぐくまれたる我等 うまずたゆまずまっしぐら
つとめはげみて一すじに 学びの道にいそしまん

芝川町立柚野小学校

霊峰富士の 山容と ともに栄える 学びやは われら至誠の標示にて 伸びるゆくてを 照らすなり
ともに みがかん わが心

芝川町立芝川中学校

朝日に輝く 富士の嶺の ゆるがぬ姿 我が心 正しく強く美しく 誠の道を求めつつ
学ぶ希望の若き花

芝川町立柚野中学校

あしたに仰ぐ 富士の嶺 高きを われらの心とし 清く明るく すこやかに 学ぼう 柚野の若人よ

(7) 山梨県河口湖町

河口湖町立大石小学校

神しずまれる白砂の 富士を南に大石の 峠を北に鏡なす 湖近き学び舎よ ここに吾等は智恵みがく
ああわが大石小学校

河口湖町立河口小学校

あしたにあおぐふじのみね ゆうべに見やる河口湖 しぜんのめぐみいとふかき われらの河口小学校

河口湖町立船津小学校

南に仰ぐ富士の山 北にたゝうる河口湖 四季のながめもたぐいなき わがまなびやの楽しさよ

河口湖町立小立小学校

仰ぎ見る富士山はたかい わたしたちの望みもこのようにと なかよく元気で通うおう
りっぱな学校よおゝ小立小学校

河口湖町立河口湖北中学校

富士に輝く朝の陽は いつも希望に燃えるいろ 自然の恵みうけながら 集う吾らの学び舎は
水と緑がよく似合う 笑顔あかるい

河口湖南中学校組合立河口湖南中学校

われらの日々に仰ぐは富士山だ この姿のように 希望は高く 世界にひらく窓よ おゝ気高い学園
河口湖南中学校

(8) **山中湖村**

山中湖村立山中小学校

夕べのきりにあらわれて 朝日にきょうも照りはゆる 気高き富士の峰近く さみどりにおう岡の辺に
すがしくたてり我が母校

山中湖村立東小学校

富士のあいもてわれらは学ぶ わが喜びわが誉れよ すめる湖心の鏡 永遠に愛せよ共につとめよ
栄えある母校われらがぼこゝ おお 富士の母校

山中湖村立山中湖中学校

から松の芽吹き緑に 富士が嶺に春は来りぬ 同胞よいざ高らかに うたわなん和協の歌

(9) **忍野村**

忍野村立忍野小学校

朝風すがし富士の峰の 尊き心を旨として 元気に学ぶ春秋よ 楽しいぼくらの忍野校

忍野村立忍野中学校

朝風かよう忍野の野 南に高き富士の峰 仰ぎて学ぶ我々に ああ青春の血ぞたぎる

(10) **鳴沢村**

鳴沢村立鳴沢小学校

学びの窓に仰ぎ見る 雄々しき姿富士の嶺 古い歴史を礎に 強く正しく励んでゆこう
あゝわれらの鳴沢小学校

(11) **上九一色村**

上九一色村立精進小学校

むらさきにおう富士が嶺の 影をうかべて静かなる 湖に向かいてひらく窓 歴史に映ゆる精進小学校

上九一色村立富士豊茂小学校

いただきは雲にそびえて 裾野原ひろがるところ われらいま肩組みあって 富士に歌えば
おおこの胸に こだまはかえるよ

上九一色村立上九一色中学校

白雪に映ゆる富士が嶺 みずうみの翠の光 大いなる天地のまほら いまここに学ぶ健児よ
高き理想は胸にもえたつ 栄えあれ上九一色中学校

(12) 富士吉田市

富士吉田市立下吉田第一小学校

気高き富士の白雪を 朝夕仰ぐわれわれは 愛と正義を忘れずに 日々新しき教え受け
明るく強く生いたたん ああ下吉田小学校

富士吉田市立吉田第二小学校

緑が丘の朝風に 希望明るくあおぎ見る 気高き富士のすがたこそ わたくしたちの心です

富士吉田市立明見小学校

大富士の嶺の朝あけだ 集う学びのこの庭は 正しく明るくすこやかに 伸びゆく明見小学校

富士吉田市立吉田西小学校

そびえる富士の白雪を 学びの窓に仰ぎ見て 明るくはげむ西小に 鳥はさえずり花は咲く

富士吉田市立吉田小学校

高くそびゆる富士の山 すそ野の岩に根をおろす 気高くかおる富士桜 かたく手をとり励み合う
伸びる吉田小学校

富士吉田市立富士小学校

おおらかにあけくれすめる 富士がねを 理想と高く仰ぎみて 共に学ばんこの窓に
真の道をたゆみなく

富士吉田市立下吉田東小学校

富士の裾野に聳え立つ 白亜の学び舎わが母校 窓辺にゆれる鈴懸の 大地に深く根をおろせ
伸びる伸びる下吉田東小

富士吉田市立明見中学校

朝日はゆる富士ヶ嶺の 雲井につゞく裾野原 流れてつきぬましみずの 桂の岸に影うつす
われらが母校明中の ゆくてに永遠の栄あれ

富士吉田市立吉田中学校

紫におう富士がねは 大地をふまえ空にたつ その気高さよ雄々しさよ 若き希望に胸もえて
学ぶ吉中わが母校 ああ吉田中学校

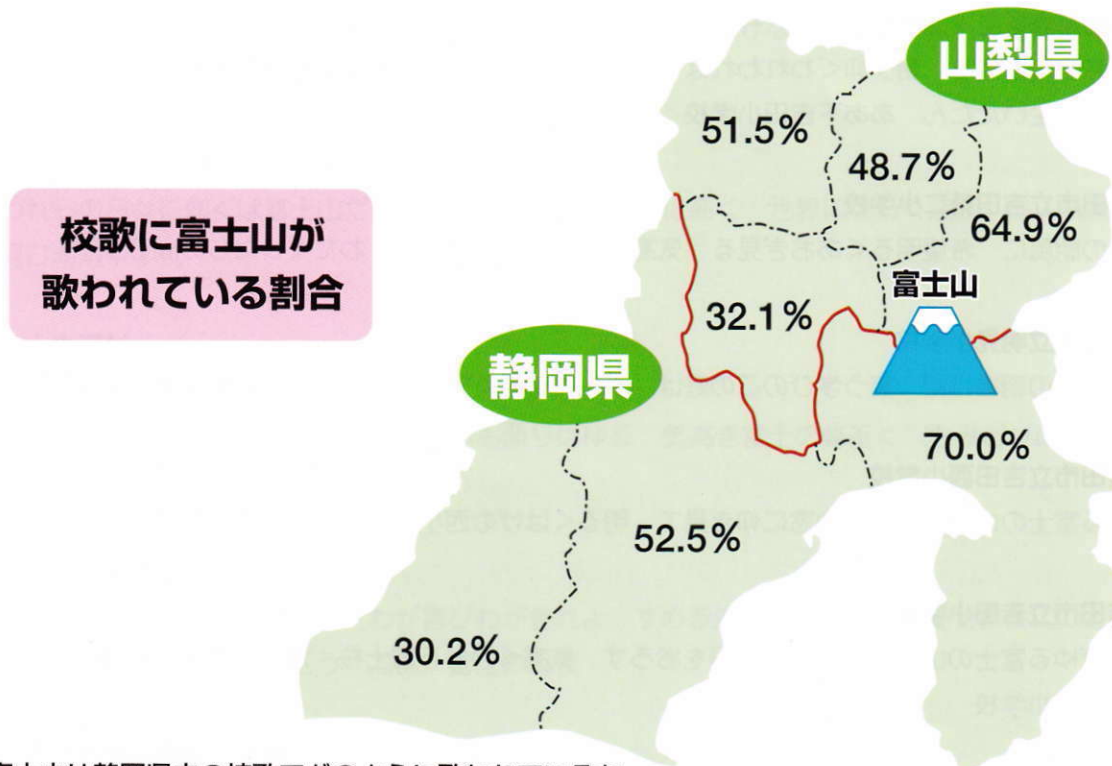
富士吉田市立下吉田中学校

霊峰富士を仰ぎ見る 緑色こき松林 楽しき日々をうち集い 我等若人はげみあう 下中 下中
ああわが母校

富士吉田市立富士見台中学校

裾野ひろぐる大富士を 学びの道の基とし 真理求むる若人が かたい誓いにうちつどう
おゝ富士見台富士見台中学校

2. 静岡・山梨両県の校歌に富士山はどれだけ歌われているか



◆富士山は静岡県内の校歌でどのように歌われているか

公立小学校

歌詞	地区	東部	中部	西部	全県
F1: 富士を手本に		31.6%	18.6%	8.0%	19.7%
F2: 富士は名山		19.8%	14.4%	7.4%	14.1%
F3: 富士が見える		16.5%	16.0%	10.5%	14.5%
N: 富士は歌わない		32.4%	51.0%	74.1%	51.7%

公立中学校

歌詞	地区	東部	中部	西部	全県
F1: 富士を手本に		34.0%	29.4%	10.4%	25.7%
F2: 富士は名山		32.0%	19.6%	10.4%	21.7%
F3: 富士が見える		4.9%	4.3%	14.3%	7.4%
N: 富士は歌わない		29.1%	46.7%	64.9%	45.2%

◆富士山は山梨県内の校歌でどのように歌われているか

公立小学校

歌詞	地区	東部	中部	西部	南部	全県
F1: 富士を手本に		5.5%	8.7%	3.8%	3.0%	6.6%
F2: 富士は名山		7.7%	4.3%	11.9%	6.1%	7.5%
F3: 富士が見える		54.1%	29.0%	28.4%	24.2%	33.3%
N: 富士は歌わない		32.7%	58.0%	55.9%	66.7%	52.6%

公立中学校

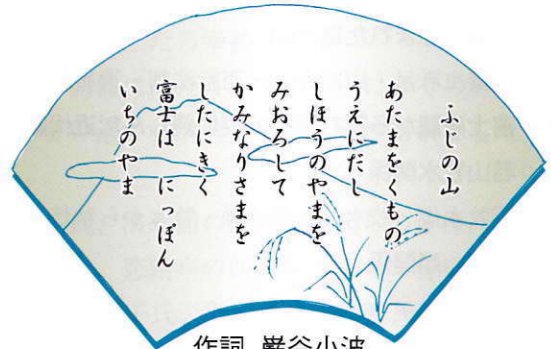
歌詞	地区	東部	中部	西部	南部	全県
F1: 富士を手本に		7.7%	20.7%	6.5%	0.0%	9.6%
F2: 富士は名山		23.1%	6.9%	16.1%	5.5%	13.5%
F3: 富士が見える		34.6%	34.5%	38.7%	27.8%	34.6%
N: 富士は歌わない		34.6%	37.9%	38.7%	66.7%	42.3%

3. おもいでで唱歌

(1) 巖谷小波

明治3(1870)年6月6日～昭和8(1933)年9月5日。明治・大正期の児童文学作家、小説家、俳人。

東京生まれ。初め硯友社の一員として『妹背貝』などの小説をかいたが、お伽噺『こがね丸』が世間に歓迎されたところから童話に専念し、明治期最大の児童文学作家となり、日本民話を定着させ、口演童話も開拓した。



(2) 林 柳波

明治26(1893)年～昭和46(1971)年。

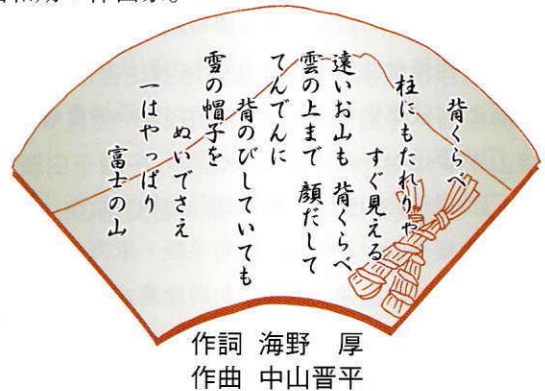
群馬県生まれ、本名照寿。昭和16年3月、新訂高等小学校唱歌に判定『ウタノホン(下)』に掲載されたこの歌の作詞者は林柳波。同じく海の情景をうたった童謡は「海はひろいな、大きいな」で知られる『海』、ほかに『おうま』などがある。漁師伯梁のため、天女が美しく舞いながら天に帰った、という伝説を生んだ清水三保の海岸。そこには歌そのままの情景が残されている。



(3) 中山晋平

明治20(1887)年3月～昭和27(1952)年12月。大正・昭和期の作曲家。

長野県生まれ。東京音楽学校卒。幸田延、ユンケルらに師事。島村抱月主宰の芸術座のために劇中歌『カチューシャの唄』『ゴンドラの唄』を作曲、大正初期(1912)に名声を得た。以後、『てるてる坊主』などの童謡を二千余曲作曲する。民謡文化賞受賞。



(4) 大和田建樹

安政4(1857)年4月～明治43(1910)年10月。明治期の詩人、歌人、国文学者。

伊予宇和島生れ。藩校を経て広島外国語学校卒。明治13年上京後、東大古典講習科講師、女高師教授を歴任。傍ら詞華集『詩人の春』『いさり火』などで文名をあげ、『鉄道唱歌』を初め数多くの唱歌集を刊行して名声を得ました。鉄道唱歌(東海道編)は、1番より66番まであり、14番・20番・29番の中に富士山が歌われている。



一つの山富士山にはいくつもの別号があります。多くの文字、異名を持つ富士山は、万葉時代の人たちの畏敬の念が、豊かな表現を生み出したのでしょう。唱歌・童謡・歌謡曲までの曲の中に登場する富士山の情景に親しみ、口ずさんでみましょう。

IV. 「富士山麓を訪れた歌人たち」〔出品目録〕

主な展示資料

I. 日本人の心 万葉から富士を詠う

○万葉に詠まれた富士山

高橋虫麻呂・山部赤人・西行法師・道興准后・飯尾宗祇・松尾芭蕉

II. 富士南麓から望む富士の姿に親しんだ近代歌人

○若山牧水関係

牧水像・牧水短歌掛け軸・牧水から秋灯への書簡・牧水短歌入り『鉄瓶』・『徳利』（裾野市教育委員会所蔵）

○川田 順関係

順像

順短歌短冊（御殿場市神山萩倉邸作品・裾野市須山山口作品）

順作品集『鵲』・『伎芸点』・『山海経』・『青淵』・『読書余情』・『東帰』・『旅雁』・『山海記』（藤沢湘南大庭市民図書館所蔵）

裾野市深良順歌碑建立除幕式写真（裾野市西島梅吉氏所蔵）

佐々木信綱短歌掛け軸、書籍『明治・大正・昭和の歌人』

信綱から渡辺徳逸への葉書き

○水原秋櫻子関係

秋櫻子像（東京都水原春郎氏所蔵所蔵）

秋櫻子俳句掛け軸

秋櫻子俳句色紙（御殿場市小松勲氏所蔵）

秋櫻子俳句入り色紙・暖簾（小山町米山彰氏所蔵）

秋櫻子俳句短冊（奇石博物館所蔵）

中西悟堂詩色紙（小山町米山彰氏所蔵）

松本破薨俳句入り染め抜き（御殿場市高橋敦子氏所蔵）

秋櫻子から渡辺徳逸への葉書き

秋櫻子俳句短冊・短歌作品色紙・色紙「海老と川魚」（水原春郎氏所蔵）

秋櫻子ゆかりの品〔俳句手帳・朱肉とはん・硯と墨〕・写真「ありし日の秋櫻子」（水原春郎氏所蔵）

奇石博物館建立秋櫻子句碑除幕式関係資料（奇石博物館所蔵）

十里木頼朝の井戸の森建立秋櫻子句碑除幕式写真（裾野市勝又一步氏所蔵）

III. 身近な富士山の歌

○校歌に歌われた富士山

静岡県裾野市・小山町・御殿場市・富士市・富士宮市・富士郡

山梨県河口湖町・山中湖村・忍野村・鳴沢村・上九一色村・富士吉田市

○おもいででの唱歌

巖谷小波・林 柳波・中山晋平・大和田建樹

あとがき

— 万葉の時代から近代の歌人・俳人まで —

富士山資料館の特別展「富士山麓を訪れた歌人たち」の資料集が完成しました。

資料館職員が今回の特別展にて取り上げた資料について紹介しています。調査等に十分な時間を取ることができず、内容等に不十分な点があるかと存じますが、御一読頂けましたら幸甚です。

この特別展の会期は平成15年9月13日から10月13日でした。開催にあたり、次のように多くの方々から貴重な資料や話題等を提供して頂くことが出来ましたので、中身の濃い特別展とすることが出来ました。

協力して下さったのは次の方々です。

若山牧水関係では牧水記念館館長榎本篁子氏、鈴木秋灯家の靖氏、清水館の野田芳徳氏らの皆様。

川田順関係では藤沢市湘南大庭市民図書館様、川田順夫人俊子氏、恋路亭の西島梅吉氏らの皆様。

水原秋櫻子関係では馬酔木主宰の水原春郎氏と康子夫人、徳田千鶴子氏、御殿場の小松勲氏、インテリアよしずみ様、須走米山館米山彰氏、裾野山岳会勝又一步氏、野鳥の会の滝道雄氏、故高橋節蔵氏夫人敦子様、奇石博物館様、渡辺徳逸氏らの皆様。

校歌に歌われた富士の関係では、清水銀行様、山梨県県史編さん室の堀内亨氏らの皆様。

ここに名前を挙げさせて頂き、お礼にかえさせて頂きます。ありがとうございました。

ところで、この特別展の準備にあたり、霊峰富士が古代より現在まで人々の心を魅了し、歌人や俳人たちによって数限りなく詠われ続けて来ていることを私共は改めて体感することが出来ました。また、調査段階で、今まで埋もれていた山麓と歌人たちとのかかわりを掘り起こすことが出来、職員一同今満足感に浸っています。

最後になりますが、今眼前にそびえる富士山がいつまでも美しく崇高な存在であり、人々に希望と感動を与えるとともに、今後も多くの方々に詠い継がれていくことを願い「あとがき」と致します。

《協力者》（順不同敬称略）

《飯尾宗祇関係》桃園定輪寺《若山牧水関係》榎本篁子（沼津市若山牧水記念館長）・沼津市若山牧水記念館・裾野市立鈴木図書館・鈴木靖・野田芳徳・裾野市教育委員会《川田順関係》川田俊子・西島梅吉・藤沢市湘南大庭市民図書館《水原秋櫻子関係》水原春郎・徳田千鶴子（馬酔木の会）・小松勲・米山彰・松本朝之・勝又一步・滝道雄・高橋敦子・奇石博物館《富士山の歌関係》堀内亨（山梨県史編さん室）・清水銀行

《参考文献》

毎日クラブ別冊若山牧水〔詩と彷徨〕毎日新聞社・「裾野と牧水と秋灯」鈴木芳子著・「水原秋櫻子全集」〔講談社〕・「秋櫻子句碑めぐり」石橋ひかる著・「俳句作法辞典」水原秋櫻子著・「馬酔木」平成15年12月号・「夢候よ」鈴鹿俊子著・「黄昏記」鈴鹿俊子著・「静岡県の学校」

裾野市立富士山資料館

名誉館長	渡辺 徳逸
館 長	勝又 勝善
学 芸 員	井上 輝夫
指 導 員	塩川 敢
	渡辺 節代